

夏に咲くスノードロップ

ぐだ市長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なー、あんちゃん

球磨兄妹って知ってるかい？

え、知らない？

あれだ。リトルの弱小チームを僅か1年で優勝に導いた兄妹だべさ

兄は全打席ホームランを打つ怪物

妹は速球MAX135キロを投げるバケモンだべ

嘘じゃねーべさ！

中学の時なんて妹ちゃん既にMAX150キロ出していたんだべ

あんちゃん、ほんとに日本人かい？

世間知らずもいとこさね。じゃあ、これだけは覚えておくべさ

今年の高校野球はよお、どうも嫌な予感がするべ

球磨さん兄妹のどちらかと対戦することになったら気を付けなよ、

あんちゃんも

特に妹ちゃんチームに当たった場合は最悪棄権することをおススメするべさ……

とまあ、何はともあれ少年少女の青春が今始まるべ!!

目次

○00○	プロローグ	1
○01○	は？ヒロイン上等。	3
○02○	モテないのはメガネのせいじゃない	9
○03○	裏・野球同好会のマシロ先輩	16
○04○	妹も好きだった花の名	24
○05○	Eなんて知らない	32
○06○	手、繋ぐ？	39
○07○	集いし烏合の衆	47
○08○	黄昏町エスぺラント VS 七森ブルース	58
○09○	明日は我が身	68
○10○	悩め、青春!!	78
○11○	宣戦布告	87
○12○	ワンストライクからだったよな？	95

〇〇〇〇 プロローグ

誓ったんだ。君と甲子園へ行くと――。

4月8日の入学式の日には、ここ天文白金学園てんもんしろがねにも青春の二オイがした。

1人の野球好きな少女によって青春が走りだそうとしていた。「野球部がないのなら野球部を作ればいいじゃん☆てへぺろん」と言い出しそうな青春を。赤毛のアホ毛とポニーテールを風になびかせた少女は正門前で仁王立ちして、青春のスタートを今か今かと待ち続けた。

入学式前に自前のユニフォームを着てくる生粋の野球女子。グローブとボールとバットを携えてキラキラした目とある男子生徒を待った。同じ新入生になる男子生徒を、正門を通り過ぎる新入生や在学生、父兄達の稀有な視線などスルーして彼を待ち続けた。関わってはいけない部類の人種なのは一目見てわかるだろうに。入学式開始15分前だろうが知ったこっちゃないと言わんばかりに。元より制服じゃなくユニフォームで登校してしまった時点で着替えることすら叶わないのだ。彼が到着して目的を果たしたらユニフォーム姿のまま入学式に参加する予定なのだから、それでいいと。

赤坂葵あかさかあおいという少女の野球人生は今日ここに全てを駆けた。

来た。

桜が風に吹かれ舞い散る中、来た。

彼だ。お目当ての彼だ。目的であり憧れであり目標にしてきた意中の彼がやって来た。欠伸して不機嫌で眠たそうにしている彼がっいに来た。

少女漫画に出てくる主人公のようなキャラさと雰囲気を持つ金髪ヤンキー君。少女漫画の主人公を実写化映画化で再現したかのような彼。耳にピアスして悪ぶってて高身長。目つきが悪く、でも女子ウケしそうな彼。その証拠に女子生徒はこぞって彼を盗み見して色めきあっていた。女子高から共学に変わって間もない天文白金は男子

生徒の数がまだ少ないこともあり、競争率は高めである。

しかし、悲しいかな、彼がシスコンだということはリーク済みである。

「この時を待っていたよ、球磨くん」

何も知らない方が幸せな場合もある。

本当に、その方が彼女たちのためでもあり、別の青春を謳歌した方がいい。そうしてくれと赤毛少女は切実に願う。怪物と呼ばれる彼と関わりさえしなければいいのだ、、そうすれば、もう1人の怪物に噛みつかれることはない。

「私は君と甲子園へ行きたい。だから、一打席勝負しよう！」

葵は球磨蒼士に挑戦状を叩きつけた。

さあ、青春のページ目がスタートする。

〇〇1〇 は？・ヒロイン上等。

『私は君と甲子園に行きたい。だから、一打席勝負しよつ！』

赤坂葵あかさかあおいの挑戦状（入学式）から一夜明けて。

あまりに現実味のない昨日の光景を姫路千草ひめじちぐさは思い出す。あんな大胆不敵な挑戦状を叩きつけた人を見たことがなかった。今どきの恋愛ドラマでも、もつとマシな演出を考えるだろう。愚直にも直球に想いをぶつけた赤毛少女のことを千草は思い出す。

葵が球磨蒼土くまそうしに挑戦状を叩きつけた後、周りがキヤーキヤー騒ぐ中、2人はグラウンドへ移動した。

本当に1打席勝負をするとは思わなかった。それも入学式前に普通はしない。しかし、球磨にも考えがあり、この1打席限りにすることを条件に勝負を受けた。2打席目はないぞと、、、証人は騒ぎを駆けつけた野次馬である千草達だ。しつかりとこの耳で聞いた。「この約束を破ったらお前、退学しろよ」「うん、わかった」と。

厳しい条件かなと思ったりもするが、無理やり勝負に付き合わされたのだから仕方がないとも思った。あのヤンキーくんは野球はできるが、やりたくないんだな、と。

それで、この1打席勝負の行方は……実はまだ決着はついていなかったりする。

「あれってもうほぼ告白じゃん……」

少女漫画かよ、とベットの途中で悪態をつく。

入学式の日によつとハメ外してユニフォーム姿で登校してきちゃった赤毛少女が、イケメン金髪ヤンキーくんに自分の想いをぶつけるシチュエーションなんて誰が想像しただろうか。

一昔前なら「私を甲子園へ連れて行って」などのお決まりのセリフがあつたらしいが、今の流行りは「私達で甲子園へ目指そうよ」である。最近増えた少女漫画野球ものもそんなセリフばかりだ。だから、それはドラマや少女漫画の中の話だけだと思っていた。

実際、リアルであんな恥ずかしいセリフを、それも大衆の面前で言う少年少女はいない。いてたまるものか。でも、いた。バカがいた。アホの子がいた。

妄想は大概にしてほしい。少女漫画とリアルを一緒にしないでほしい。赤の他人だとしても見ているこつちが恥ずかしくなる。今日、どんな顔して学校へ登校したらいいのだろうかと悩むほどに。葵と同じクラスであることは昨日確認済みで、今日彼女と視線が合ったらなんて声をかけるべきなんだろうかと悩んでいた。ヤバい人と同じクラスになつてしまったと悩んでいた。

このまま学校行かずサボろうかとも思った。中学時代と同じく引きこもりでもいいかとも思った。2日目にして学校へ行く気力は無くしつつかつた。

でも、凄いなと思った。あの告白を近くで見ると鳥肌が立った。身震いした。不完全燃焼だとしても、リアルで誰も知らないようなことを葵はしたのだ。あれが青春というやつなんだろうか。高校生って凄いなだなくとも思った。

それに比べて私は……

「私はある風にはなれないかな……」

千草を悩ませて引きこもりになろうとしている理由はもう1つ他にあった。

結局、朝の起きる時間になつてもなかなか起きようとしなかったため、鬼のような母親によって強制的に起きるハメになった。鬼ババ、と心の中だけで悪態をついた。

1階のリビングへ降りると父が今朝の情報番組を見ていた。ちょうど、スポーツニュースが流れている。うう、今あまり見たくない映像が流れていた。眩しくて直視できない。それは千草がこの世で一番眼球の裏側に焼き付けた映像であった。

『見事、最後のバッターを空振り三振に仕留めた東雲一蘭投手！ 開幕して早くも2勝目です！ いや、我らが姫は絶好調ですねー！ 風神の如く雷神の如し圧巻のピッチング！ くうくシビれるうく!!』
『モブ子アナさん、少し落ち着いて。彼女、開幕して1カ月ぐらいは敵

無しですからねー。登板数の回転もこの時期は早く、今のうちにチームの貯金を稼いでくれるでしょう』

「あくん、やつぱり姫が一番だよ〜」

「こら、千草、、、テレビに噛り付くんじやない。見えないじやないか」敬愛するプロ野球選手がテレビに映った途端にこれだ。憧れの選手が登場するとテレビ越しに頬ずりしてしまふ悪い癖。熱狂的なファンの禁断症状といったところか。父親からの「テレビに噛り付くな」は果たして比喩だろうか……それは美少女である彼女の名誉を守るためにも皆まで言うまい。

「はあく、やつぱり姫はカッコいいな〜」

現在、パ・リーグで活躍する女性初のプロ野球選手として注目を浴びている東雲一蘭しのめいちらん。

新たに4球団発足された内の1チームに入団して以来、今シーズンで5年目になるも、衰えを見せるどころか今が全盛期バリバリといった感じでどのスター選手よりも輝いている。

新人賞・沢村賞など数多の受賞を総なめにしてきた平成の怪物。男勝りな気迫あるピッチングが爽快で、女性ファンにも人気が凄い。スポンサー契約は勿論のこと、モデル体型ということもありCMに起用されたり、スポーツ雑誌だけでなくファッション雑誌の表紙を飾ることは既にお馴染みである。

マウンドが似合う女性投手ナンバーワン。バッテリーを組みたい女性投手ナンバーワン。お嫁さんにもらってほしい女性投手ナンバーワン。金髪ロングが似合う女性投手ナンバーワン。

だから、幸せのため息が出るほどに千草も東雲選手に強く憧れを抱いた。

「行きたくないけど、行ってきます……」

さて、と。憂鬱な登校の時間。

千草は東雲選手に憧れた。憧れるだけじゃ飽き足らず、お近づきになりたいと思うほどだった。それはファンなら誰もが1度は思うだろう。では、どうやって彼女に近づくか、あわよくばお話しできる機会を得られるのだろうか、親しくなれるだろうか。

千草の答えは簡単だった。

自分もプロ野球の世界に飛び込めばいい。東雲選手と同じチームに所属してしまえばいいと答えを導き出した。なら、自分も女子プロを目指すのかと問われれば、そうではない。

千草は自他認めるほど運動音痴である。ドジっ子である。どのポジションも適正ではない。限りなくプロとしてスカウトはされることはまず方が一にも可能性はないだろう。分野が違う。だから、彼女は別のアプローチを模索した。

必ずしも野球とは野球をプレイする選手だけのゲームではないだろうと考えた。千草は知っている。マネージャーという存在を。東雲選手の専属マネージャーを。答えはここに導き出された。

東雲選手のスケジュール管理、健康管理を全て担う唯一無二のマネージャーってありじゃないかと。登板した時はマネージャーである自分がマツサージをしてあげて疲れを癒し、休日は彼女のために栄養満点の料理を作ってあげたらどれほど素敵だろうか、と愚直にも考えた。野球はできないけど、野球のマネージャーなら自分でもできるのでは、、、と。

だから、千草は己の野望のための下準備として、高校に入ったら野球部のマネージャーをすることを決意した。できれば強豪校で最先端のトレーニング方法やマネジメントを教えてくれる高校を目指すことにした。

しかし、何故か千草は野球部のない、この天文白金学園へ入学してしまった。

入学した理由を思い出すだけで馬鹿らしい。

天文白金学園の正門前で立ち止まり顔を上げた。学園のエンブレムを親の仇でも見るかのような目で睨みつけ、千草は「私はバカなのか」と小さく悪態をついた。

ウェーブのかかったピンクゴールドの髪が風でなびく。この髪の色を東雲選手に褒めてもらうまでにどれだけ遠回りするのだろうか、、、

ちよつと考えればわかることだった。

ちよつと調べればわかることだった。

本当に私はドジっ子なのだろうか。おつちよちよいさは赤毛アホ子に引けを取らないレベルだろうか。このキャラはいつまで演じなくちゃいけないのだろうか。

あの河川敷で爽やかにランニングしてた天文白金の選手達がまさか、女子ソフトボール部だったなんて、勝手に野球部と思い込んでいたなんて、死んでも誰にも言えない。真実は墓場まで持つていくしかない。スカートスパッツなユニフォームが可愛かったからこの高校に決めましたと、あの日の笑顔の自分を殴りたい気持ちである。ただ、もう過ぎてしまったことだ。もう少しうじうじして引きこもりたかったが、赤毛アホ子にあんなものを見せられた。

それに、、

「なにこれ……」

千草は自分の下駄箱に手紙が入っていることに気づいた。ラブレターならまだ動揺しなかっただろう。彼女が想いを寄せているのは雲の上の存在のような姫なのだから。だから、周りの目も気にせず冷めた気持ちで中身を確認した。

『球磨蒼士は東雲一蘭の いとこ である』

オーケー、一度を深呼吸してみよう。落ち着いてみよう。手紙を破り捨てたい気持ちを抑えて冷静になろう。あのヤンキーが姫のいとこ？ 誰の嫌がらせかは知らない。だけど、嫌がらせで片付けていいものでもない。もし、ここに書かれてあることが事実なら……
だったら……

「アホ子には負けてられない……っ!!」

は？ ヒロイン上等。

野球部がなければ作ればいい？

まだ赤毛アホ子とヤンキーくんの勝負はついてない？

なら必ず球磨蒼士を野球部に入れてみせる。そして、自分のモノにして東雲一蘭に少しでも近づくんだと……姫路千草は今日からヒロ

インの座を狙って本気を出す。

〇〇二〇 モテないのはメガネのせいじゃない

くろせ たつき
黒瀬竜紀は天文白金学園へ入学した。

「竜紀、アンタがモテないのはメガネのせいなんかじゃないわ」

「いきなりなんだよ姉ちゃん」

「メガネでもモテる奴はモテる。モテるメガネとモテないメガネの違いはなんだと思う？」

「顔、性格、身長なんじゃねーの……」

「違うわよ。野球をしているかしていないかの違いよ」

「は？」

「ということ、天文白金学園へ入学して野球部に入るのよ。無名の高校が甲子園で活躍してみなさいよ。メガネの冴えないアンタでもきつとモテるわ」

「マジで言ってるのかよ姉ちゃん!？」

しかし、天文白金学園に野球部はなかった。

あの姉が自分の勤務する高校の野球部とソフト部を間違えるはずもなく、ハメられたと気づいた時は既に遅かった。その件について家に帰って問い詰めるも、「野球部がなければ作ればいいじゃない」と一蹴される。初めからこれを狙っていたような口ぶり、1年A組に赤坂葵という野球バカがいるそうな、彼女と共に野球部を作れと命じられた。

赤坂葵というのは入学式直前にヤンキーに挑戦状を叩きつけたアホの子だ。姉からの説明でメガネ君の中で名前と顔が一致した。

そして、ヤンキーというのは球磨蒼士。1年F組、同じクラスの男子だ。

だから、げんなりした。

「あ、球磨くん！ こんな所で会うだなんて偶然だね！」

翌日、朝から1年F組前の廊下は騒々しかった。

例の問題児が現れた。赤毛アホ子が現れた。何が偶然なものか。メガネくんは彼らに巻き込まれないように遠巻きで様子を伺った。

「昨日のあれは絶対レフト線ファールだからね！ まだ負けたわけじゃないんだから！ 顔洗って待っててね！」

「あ？ あれはどう見てもホームランだっただろうが。もうやらねー」

「いやいや、あんな際どいスレスレのレフト線をドヤ顔でホームランって言われましても！ どうせ、ブランクで見極めきれず少し焦ったんじゃないの？ それを認めるのも怖いんじゃないか？」

「お前凄いな……。気が変わった。なんなら今から続けるか？」

「あ、今は駄目です。まだ、そんな、昼から求められても心の準備が。私照れて嬉しくて困ります／＼／」

「うぎ……」

確かにウザイ。メガネくんは彼に同情した。

あの日、メガネくんも野次馬の1人だった。だから、知っている。

2人の決着はまだ着いていないことを。

葵の投げた第1球目が球磨のフルスイングによってレフト線の際どいラインで学園のフェンスを越えていった。ガシャンと嫌な音がしたが、それは置いといて。球磨はホームランを主張、葵はファールを主張したのだ。どちらも互いの主張を譲り切れず、かと言って第2球目を投げることは叶わなかったのだ。持参したボールは1球のみ。ボールはフェンスを飛び越えてしまったために取りに行かないといけないのだが、騒ぎを駆けつけた教員が総出で赤毛アホ子捕獲作戦を実行して、1打席勝負は中途半端な形で終わってしまった。

確かにあれで決着というのは煮えたぎらないよな、とメガネ君は思う。かと言って野球をしたくない奴に無理やりさせるのもどうかと思う。さらに言えば、あまりヤンキーを刺激させて不機嫌にしないで

くれませんか、ほんと怖いからヤメテ、、、と赤毛アホ子に心の中で悪態をつくっておくことにした。

で、そんな問題児に放課後呼び出されるのであった。全然嬉しくないのは皆まで言うまい。

『メガネくん、至急かつ迅速に1年A組の教室に集合してください。天文白金学園・野球同好会の勧誘ポスターを作りましたので意見をください』

業務連絡のようなラインに気づいたのは駐輪場で自転車に跨った後のこと。めんどくさいから既読スルーして帰ろうかと思ったが、もう一通きた。

『追伸——可愛いマネージャーをゲットしたのでついでに紹介したいんだけどなー。既読スルーして帰っちゃうのかー、じゃ明日紹介するねー。また明日ー笑　ちなみに、私は君のお姉さんと仲良しなんでチクつときまーす笑』

校舎の窓から赤毛アホ子がこちらを笑顔で見下ろし手を振っていた。さよならしていた。

たまらずUターンした。

メガネくんは姉にチクられるのが怖いからUターンした。1年A組の教室へ目指した。自分の動向が筒抜けで心を見透かしたような文面は癪ではあったが、とにかくUターンした。A組の女子たちが何このメガネー邪魔なんですけどー、などと鬱陶しそうにしていたけどもスルーして。

いた。本当に赤毛アホ子ともう1人美少女がいた。ピンクゴールドのゆるふわ系巨乳マネージャーだ。メガネくんの中で何かが弾け飛んだ。

「お、やっと来たね、メガネくん。全力ダッシュで来るだなんて君は男

の中の男だねー」

「ぜーぜー、ね、姉ちゃんにチクられたくなかったからな……ぜー、はー……」

「まー、そういうことにしておくね」

にやにやする赤毛アホ子。チラチラとこちらの様子を伺ってくるゆるふわ美少女がいる手前、あまり強く反論できなかった。

机を二つくっつけて向かい合わせで座っている美少女2人。勧誘ポスターの案をルーズリーフにあれこれ書いてあるのが見て取れた。

「それよりもさ、その辺からテキトーに椅子拝借して座りなよ。チーちゃん紹介したいからさー」

「え、あ、うん……」

「ん？ 椅子はどれでもいいよ？ 遠慮しないで」

「……………」

女子多めの他クラスなのだ。こっちの気持ちも知らないで……

「さ、座ったね。じゃ、改めまして！ 天文白金野球同好会に新たな仲間が加わりました！ マネージャーのチーちゃんです！」

「ひ、姫路千草です……その、よろしく、ね」

ぎこちない笑顔がまたメガネくんの中で何かが爆発した。

「チーちゃんはこう見えて絵がうまいんだよ」

「趣味で、プロ野球選手の似顔絵やマスコットキャラを描いたりするから……あまり、人に見せるものじゃないけどね」

「で、でも、凄く上手い……っ!!」

「あ、ありがと……」

メガネくんの語彙力低下中。チーちゃん若干引き気味中。

「で、こっちの眼鏡がメガネくんね、チーちゃん」

「おい」

「く、黒瀬竜紀くんだよな？ 葵ちゃんから聞いてるよ。なんでも黒瀬先生の弟さんだとか……？」

「でも顔は全然似てないよねー。うむうむ、野球の神様は残酷なことをなさる」

「それはほっとけよ……」

ちよつと心外だ。

鼻筋あたり姉弟そっくりなのに、とは反論しなかった。

「それでね、メガネくん。君をお呼びだてしたのは他でもなく、野球同好会の部員を増やすために我々は一つの作戦として勧誘ポスターやチラシを作ろうかと思っていて、男子である君の意見も欲しかったんだ」

「なるほど、そういうこと……」

「で、私とチーちゃんそれぞれポスター案を考えてみたんだけど、ちよつとどつちがいいか見てくれない」

「う、うん」

メガネくんはふと気づいた。

高校生活も悪くない、こんな日常回も悪くないと、

今思えば中学時代、女子とこうして話をする機会なんてあまりなかった。学校の行事で少し、文化祭の準備で少し喋れたら良い方だった。灰色の青春送っていた。それに地元のヤンキーは怖かった。

しかし、今この瞬間はどうだ。女子2人に男子1人でリア充満喫してるんじゃない？

結論から言えば、ヤンキーは嫌いだが野球同好会に入って良かったなと思った。

赤坂葵には意中の相手がいるけど、姫路千草はどうなんだろう、も

しかししたらワンチャンラノベ的お決まり展開に発展するんじゃないか、と心を躍らせた。

葵から渡されたのは2つのルーズリーフ。

カラフルなマジックペンで書かれたラフ案ともいえる簡単なデザインだった。うん、2人の個性が良く反映されたポスターを作成していた。

『君と甲子園に行くために私は何だったってするよ！ カモン球磨くん！ 愛ラブ球磨くん！』

これ、赤坂葵：作

でかでのハートマークと主張が強すぎるキャッチコピーがカラフルに書かれていた。愛の重たいポスターだ。

ま、まあ、予想できた事案だ。

『天文白金に新たなる風を！ ゼロから甲子園を目指す野球同好会！
今なら君も即戦力！』

これ、姫路千草：作。

キャッチコピーはそれっぽく、球児たちが甲子園を目指そうとイラストも上手く描けていた。ただ、残念に思うのがヤンキーらしき球児が主役で自分っぽいメガネが端っこの方で見切れていたのが非常に残念だった。

さらに観察して見ていくと、下の方にこっそり小さく不要な一文を発見した。

『さらに、球磨蒼士と名の付く人物の弱点情報を持ってきた人はポジション・スタメン順位要相談可』

メガネくんでも予想できなかった事案だ。

「ひ、姫路さんも、その……あのヤンキーのことが好きだったりするの？」

たまらず聞いてしまった。

「ええー、そうなのチーちゃん!？」

「ち、違うの、これは……こ、甲子園に出場するのって、やっぱり強い選手がいてくれた方がいいから。別に、球磨くんのが好きとかそういうのじゃなくて……」

「ふー、よかったー。びっくりしたよー。チーちゃんが球磨くんのことと好きだったらどうしようかってハラハラしたよー。ふひー」

「う、うん、本当にそういうつもりで書いたんじゃないからね」

「あははー、だよねー」

「あはは、うん………今はね………」

「「え………」」

やっぱりメガネくんはラノベ主人公になれないのかもしれない。淡い恋心はあっけなく消し飛んだ。

だからこそ、なおさら甲子園行ってアイツよりモテてやる、とやる気を出すことになるのだが。今は、この二人のポスターの修正案を考えてまとめるのがメガネくんの役割である。

〇〇三〇 裏・野球同好会のマシロ先輩

野球同好会の活動はポスター作りとビラ配りで部員の募集をする所から始まる。

姫路千草ひめしちぐさにとってビラ配りは憂鬱でしかなかったが己の野望のため頑張ることにした。ただ、初日を終えて手応えは限りなくゼロだった。

ポスター、チラシ共にメガネくん監修の元、良いものに仕上がった自負がある。デザイン会社への就職するための一つの作品候補に挙げていいぐらいには出来栄はよかった。しかし、問題の論点が違う。少し考えればわかる。しかし、思っても決して自分の口から出してはいけない。特に赤坂葵あかさかあおいの前で言っではいけない理由がそこにあることは明らかであった。

——— 野球をしたい奴らは野球部のある学校に進学している。

天文白てんもんしろ金学園は主に学芸に力を入れた学園である。音楽・書道・茶道・演劇・芸術など、コンテストに出場すれば全国レベルと言われる名門校であるがスポーツ高校としては知名度が低く二の次である。せいぜい健康面を考慮して適度に体動かしなさいよと、その程度の認識だ。たまたま強くなってしまった女子ソフト部は例外であるがな。誰も今さらこの学校で野球をしたいと思う生徒はそういないものだ。普通の勧誘じゃ生徒は入部してこない。

だから、昼休みはターゲットを絞って勧誘活動を試みたりもする。

「あ、ポスターが……」

ほら、こういう悪意のあるイタズラまで起きる。

葵の強引な勧誘の反発だろうか。それとも球磨蒼土くまそうしの仕業かなとも疑ってしまう。せっかく作って掲示板に貼らせても

らっているポスターが何者かの手によって破られ捨てられていた。こういうのを見ると気持ちが沈む。

破れた破片を拾って教室までゼロハンテープへ取りに行く。いや、葵にコレを見せたくないから職員室で借りようかと回れ右した。

「そのカワイイお嬢さんや、ちよいとお待ちなさいな」

「は、はい……」

千草は胡散臭い占い師に絡まれたように呼び止められた。

振り返るとやはり胡散臭い生徒がいた。足がスラつと長くてキレイでスカートをはいていることから女子生徒とはわかる。腕を組み強調される胸。千草に負けないうらいポリウムはあるからよほどのことがない限りは女子生徒である。しかし顔のパーツがカエルだった。ド☆ドンキとかで売ってそうな動物の被り物をかぶった変人がそこにいた。

少女漫画でしか高校生活を知らない千草はこう思った。高校生って凄いなあと。

「職員室にゼロハン取りに行こうとしてるのかい？ だったら、生徒会室の方が近かったりする。ついてきたまえ」

「え、えと、はい……」

有無を言わぬ芯のこもった声。被り物している割にはくぐもつておらずナチュラルに聞こえた。

千草の性格上、ノーと言えずついて行くことにした。面倒ごとに巻き込まれるのは嫌いなタイプであるが、高校生活で自分を変えると決めたからなのか、あまりに非日常な光景が目の中の生徒から感じ取ったからなのか、興味本位でついて行くことにした。

それに、カエル顔の生徒は生徒会室に案内するみたいだ。人気のない不良達のたまり場に誘導されるわけでもなさそうだと思いついて行くことにした。

「生徒会室はここだよ。ちよつと外で待っていてくれたまえ」
「は、はいー!」

本当に生徒会室まであつという間だった。角を曲がればそこだった。

カエル顔の生徒はノックもせずに入っていく所を驚きさえするも、カエルの人は生徒会のメンバーなのだということはなんとなく読めた。

中からこんなやり取りさえ聞こえた。

「ましろ……いえ、生徒会長……また変な恰好して校内ブラついてたんですか? わたくし、言いましたよね? 生徒会のイメージをぶち壊すようなことはしてくれるなど。なのに貴女って人は……っ!!」

「まーまー、副会長、一旦落ち着きましょうよ。この人はこの人なりに、お堅い生徒会のイメージを少しでも和らげようとして、生徒さんとの交流を深めるための粋な計らいをしてくださってるんですよ、きつと。そうですね、生徒会長?」

「ん? これはボクの趣味だよ!」

「よーし、そこになおれ! 今日こそ、そのふざけた顔を剥ぎ取ってやりますわ!」

「あだだ、よすんだキミ! これはボクの一部だ! ボクのプリティーな目ん玉だ!? もが、腹を殴られた!? くそつ、油断した!! 怯んだ隙にボクの顔を剥ぎ取ろうつて算段か!! だがしかし無駄だぜ副会長! 考えが甘いな幼馴染の女あ!! ボクのアイデンティティはちよつとやそつとじゃ崩せやしないのさ!!」

「くつ、バカの顔を剥ぎ取ったつもりだったのにバカな!? もう一枚装着していたというのですか!?!」

「これぞまさしく『脱皮』というやつだぜ!!」

「ブッコロ……っ!!」

「あの一生徒会長。外にお客さん待たせてるんですよ?」

なんて、生徒会室から聞こえてきた。

「なに、これ……」

というか、ゼロハンテープ……

「あの一、ゼロハンテープを借りに来た生徒さんですよね？」

「あ、は、はい……」

「ごめんなさいね。今、生徒会長は取り込み中でして」

「はあ……というか、あのカエルが生徒会長、なんですか？」

「う、うん。ちよつと変人だけど、でも、良い人よ。きつと……」

「……」

千草の中で入学式の時に壇上に立って挨拶していた生徒会長のイメージが今ここで崩れるのであった。やっぱり高校生つて凄いな……

とりあえずゼロハンテープをゲットした。

○

去年の夏。

有栖ありすましろ茉白はリトルシニアの県大会決勝戦を観に来ていた。妹が出場する試合であり、なかなか姉である自分を試合に呼んでくれなかった妹が「最後だと思うから来てもいいよ」と許可をもらって観に行つた試合である。茉白はとても大いに喜んで、幼馴染と応援しに行くことにした。妹はそんな姉を苦笑いで見ていた。

黄昏町エスぺラント VS 七森ブルース

有栖妹は七森ブルースのチームで、一番シヨート。とても優秀な選手だったと聞いている。チームも全国を狙える将来有望な選手が多い中の一番シヨートだ。茉白は誇らしかった。それで妹から聞かさ

れていたのは親友のエースも凄腕で自慢していたことを思い出す。赤髪で帽子的下からポニーテールがはみ出して笑顔がキラキラしている女の子が印象的だった。美少女好きな茱白にとってどストライクだったがために、有栖妹は姉に親友の紹介を躊躇っていたともいう。

1回の表。守備の回。妹の親友は庄巻のピッチングで三者連続三振にしてみせた。会場が湧く。何、あのピッチング？ サブマリナー？ クロスファイヤーだ!! と茱白には聞きなれない単語が客席のあちこちから聞こえてきた。何かは知らないけど凄いことが起こっていることだけはわかった。隣にいる幼馴染が説明してくれなかったら終始ぼかん状態だっただろう。

幼馴染曰く、全国を狙えるんじゃないかと期待できるピッチャーなのは確かだそうだ。

だから、なお一層気合を入れて応援しなきゃと思った。周囲のボルテージも初回からマックスに近かった。皆が彼らに期待していた。お兄ちゃん頑張れ!と。お姉ちゃんファイト!と無邪気な子供達の応援が沢山聞こえてきた。

だから、妹たちは最後まで戦ったんだろう。

『1番、ショート。有栖燕』
ありすつばめ

「ツバメちゃんー! かつ飛ばせー!!」

「いけー有栖ー!! 初回から狙っていけー!!」

「相手のピッチャーがどれだけバケモンでもお前なら打てるぞー!!」

「打て打て有栖!! お前が打たなきゃ誰が打つー!!」

本当に凄かった。父兄たちも自前のメガホンを激しく叩いて応援していた。きつと妹なら打ってくれる。チャンスを作ってくれると信じた。

相手ピッチャーはこちらのエースと同じく女の子だった。今は野球も女子が男子よりも活躍する時代だそうだ。長身黒髪のキレイな

女の子だった。この声援の中、プレッシャーも屁でもないかのように澄ました顔をよく覚えていて。あの冷たい目も覚えていて。球がもの凄く早いことも覚えている。

名前は忘れもしない。

球磨雪那。絶対に忘れるものか……

3 | 0

試合結果だけを見れば僅差で黄昏町エスペラントの勝利。お互いのエースによる投手戦といえば美談であったろうが。あれが美談？みんな最後までよく頑張った？ふざけるな！そんなことぬかず輩は茉白が黙っていなかった。

しかし、試合終了してもなお、何が起きたのか茉白は理解するのに時間がかかった。ただ、茫然と立ち尽くす。最終バッターになった妹の身に何が起きたかも理解できないまま。

赤髪の少女は糸の切れた人形のように一塁ベースの上でへたり込んでしまっていた。現実を直視できなかったみたいだ。

グラウンドが慌ただしくなっていく。チームメイトが、監督が、審判が心配して妹に駆け寄っていく。チームメイトの何人かが球磨雪那にぶちギレた。乱闘騒ぎにまで発展しそうな険悪な雰囲気漂う。父兄の怒号と呼べるブーイングが観客席から、憎むべき少女に向かってメガホンさえ投げつけた。

そして、サイレンが聞こえる。試合終了を告げるかのように、遠くの方から、幼馴染が呼んてくれた救急車のサイレンが……

妹は、有栖燕は試合直後に病院へ搬送された。

○

あれから半年以上過ぎた。

茉白は彼に会ったら聞きたいことがあった。

例の一度破られて修繕されたポスターが貼ってある掲示板前で待

ち伏せをして、問い詰めてやろうと思ったことがある。

『4月18日（水）放課後16:30〜理科室にて野球同好会のメンバー紹介&初ミーティング開始』って書いてあるけど、キミはこれ行くのかい?」

聞きたかったのはそうじゃないんだけどな、と茱白は思う。

返答も予測されていたものだった。

「誰が行くかよ……」

「そうかい、それは残念だ」

心の底から残念に思う。

「つーか、誰?」

「ん? ボク? ボクは裏・野球同好会のメンバーの1人、マシロ先輩だぜ。お見知りおきたまえよ、球磨雪那のお兄さん」

「……………」

球磨蒼士も予想外の名前を出されて。一瞬、呼吸をするのを忘れてしまった。

「葵ちゃんはさー、当事者なのに、よくあんな笑顔でキミに野球しようなんて言えたもんだよねー。親友があんな目にあつたというのに……あの笑顔がたまらなく恐ろしいぜ」

「お前……」

執念だよねー、とカエル顔の先輩は笑う。

「ボクなんか、ずっとキミ達兄妹に復讐したいと思ってるのに……なーんちゃって」

ケロケロと真っ白いカエルは笑っていた。

〇〇4〇 妹も好きだった花の名

「休み時間はまだ少しある。なら、ちよつとついて来たまえよ、球磨雪那のお兄さん」

「ちつ……………」

ありすましろ 有栖茱白くまそうしに言われ球磨蒼士は後をついて行くことにした。

別にスルーしてもよかつただろうけど、そうした場合、後々に面倒なことになりそうだ。だから、大人しく今はついて行くことの方が賢明だと判断したのだろう。

たまにすれ違う生徒から奇異な視線を浴びるわけだがそれもスルーして。というか、悪目立ちしているのはどう見てもカエル顔のマシロ先輩である。彼女が生徒会長だということを、この生徒たちはどれだけ知っているのだろうか。

(ジョウロ、か……………いつの間に?!)

めんどくせーことになりそうだと、ため息を吐いて廊下の外の眺めていたその隙にマシロ先輩はジョウロをどこから調達してみたみたいだ。何もない所から調達できるわけもなく、マジシャンでもない限り彼女にできる芸当でもなく、これは事前に準備して廊下の隅に置いていたのか、誰か用意させて待機させて受け取ったのかもしれない。球磨の推理はそんなところだった。

何にしろ、それで何をするのかはもう察した。やることは一つしかないだろう。だから、余計に腹が立つ。花に水をやり、その先の展開まで読めてしまうことに。

彼らは学校の玄関前の花壇に到着した。

「キミに花を愛でる趣味はないだろうけどさ、ここはボクの趣味に付き合ってもらおうか」

そう言つてカエル顔のマシロ先輩は花壇に植えられた花に水を与えていく。

趣味というより悪趣味だということにはわかった。いろんな種類の花が咲いていた。名前もわからない花たち。でも、そんな中に球磨でも知っている花が咲いていた。

「この白い花、ボクの妹も好きな花だったんだぜ」
「……………」

冬の終わりから春先にかけて花を咲かせ、春を告げる花。

それは有栖燕ありすつばめが好きだった花。されど、嫌いになった花。

球磨もよく知っている花。

花の名はスノードロップという。

「こんな可愛らしい花なのに、ある伝説のせいで『あなた（花を受け取った人）の死んでいるところを見たい』ということ暗に意味することもあるらしいぜ。この花を人に送るときは特に注意が必要って話なのだよ」

「そうだな。それも知っている……………」

嫌気がさす。

そんなこと言われなくても知っている。球磨はスノードロップの花言葉、伝承、育成のコツ、すべて調べて尽くしていた。

「キミもあの日球場にいたろ？ だから、解せない。その花言葉の意味を知っていながら、キミは何もしなかった。それが球磨雪那の実の兄であるキミの罪なのだよ」

この手の者はみな口を揃えて同じことを言いたがる。だから、この学園へ逃げてきたというのに。

赤坂葵とは別のアプローチを仕掛ける輩がこの学園にもいた。

こういうことを言いだすバカと野球部のない、野球に興味を持たない者たちの中に紛れ込めたと思ったのに。どこに逃げても一緒だった。もし、他所の野球部のない学校へ進学していてもこの手のバカは他にもいただろう。それは3年前から一緒だ。くそつたれだ、まったく。

球磨は花たちから目を逸らした。

「……で、オレにこんなもん見せて言いたいことはそれだけか？ それで『はい野球やります』って言うと思ったか？ 残念だったな、それはまずない」
「むっ……」

マシロ先輩に睨まれた。被り物越しだが、そんな気がした。

そして、マシロ先輩は自分の行いがさほど相手に精神的ダメージを与えていないところを見て馬鹿らしくなりため息を吐いた。

「はあ、ボクもこんな嫌がらせをして大人げなかったね。生徒会長の風上にもおけないや」

「え、お前生徒会長なの？」

「あ、今のは違うぜ。生徒会長からも一目置かれているマシロ先輩だぜ。てへぺろん」

「まあ、なんでもいいけどよ……」

この学園はバカが多すぎる。球磨もため息をついた。

「改めて、これだけは言わせてもらおうか。球磨雪那のお兄さん」
「なんだよ……」

「今、ボクは相当腹が立っている。ムカついている。だけど、ここでボクがキミ達兄妹に復讐することなんてできないのさ。それこそ筋違いだろうし、妹も望んではいないだろうさね。でも、だからといって納得できる話しなわけでもないのだよ。せめて誰かがキミに言わな

くちやいけないのさ。あんな悲劇をもう二度と起こさないためにも、誰かがキミに訴え続けなければならぬ。それが今回はボクが役目を負っただけなんだろうけども」

「……………」

「罪を償えとはボクは言わない。だが、責任は取れ！　それが兄貴つてもんだぜ」

そう言つて、カエル顔のマシロ先輩は球磨にジヨウロを押し付けて渡した。まだ中に残っていた水が彼の制服に飛び散った。数滴、染みを作つていく。一矢報いるかのように。

そして、校舎の中へ去つていった。

それを見届けた球磨はその場にしゃがみ込んだ。

「お前……あの日、あの場所にオレがいると知つたら、それこそブチギレてただろ？　なあ、雪那せつな」

白い花に水をやり、球磨はあの日の出来事を思い出す。

○

妹のオリジナルストレートを『スノードロップ』と名付けたのは兄である球磨自身だ。

勿論、悪意も殺意もなく、ただ純粹に今の球磨兄妹である自分たちにぴつたりな花言葉だと思つたからこそ名付けたのだ。だけど、妹のオリジナルストレートが危険球になつた時に何を意味するのか、それがどれほど最悪の球種なるかを考えなかつた自分の失態なのはこのまでもなかつた。取り返しのつかないことをしてしまつたと思つた時はもうすでに遅かつた。

あの日の悲劇の序章にあたる1回の裏・七森ブルースの攻撃。

1番・シヨート・有栖燕^{ありすつばめ}。

雪那が大きく振りかぶって投げた球はバッターの顔面スレスレコースだった。

燕はそれを危機一髪でなんとか顔面コースの球を躰した。球速は150キロを超えると言われているストレートだ。『スノードロップ』と呼ばれる最悪のストレートだ。中学生ぐらいの少女が生身で当たれば、軽傷では済まされないが、身体能力が高かった彼女だからこそ避けた。

尻もちについて回避できた。ヘルメットが転がる。観ている角度が違えば当たったんじゃないかと思える緊迫した一瞬だった。どよめきが起きる。

『スノードロップ』が燕に死球を要求したのだ。

しかし、燕は苦笑いするだけで立ち上がり再びバットを構えた。今しがたの危険球にも関わらず臆せずバケモノと対峙した。

あの時、兄である自分が観客席から妹に声をかけ注意していたら何かが変わっていたのかもしれない。しかし、あの日、球磨には何もできることはなかった。何かをする資格すらなかった。

今さら、誰に何を言われても野球をするつもりはない。野球も妹も見捨てた男に野球をする権利なんてあるはずもないのだから。

○

「ボス、話って何でございましょうかー？」

昼休み時。

ヤンキーいじめも上々で今は気分がいい。茱白は理科室へ訪れていた。

裏・野球同好会の活動は電気もつけず、カーテンを閉め切った薄暗

い部屋で行われる。明かりは僅かボスと呼ばれる者の手に持つスマホのディスプレイ明かりのみだ。

「マシロ。アンタ、蒼土にちよっかい出したの？」

「お耳が早いようで。誰から聞いたんですー？」

「誰でもいいでしょ、そんなの。それよりも、アンタのせいであの子が不登校になったらどうしてくれるのかしら？」

「それはいかせん過保護すぎるのでは？ それに生徒会長に嫌がらせを受けて不登校になったヤンキーなんてナンセンスですぜ。チョーウケるんですけど」

「はあ……とにかく、もうアンタは出しゃばらないの。あの子との決着は葵が着けるんだから」

「本当に葵ちゃんで大丈夫ですかー？ ボクの科学班がシミュレートした結果、勝てる保証なんて0%に近かったですけどねー。正確には0.23%ですけどね」

「でも、アンタの0%より数値は上よ」

「そいつは心外ですけど事実なんですよねー。やっぱり経験の差がモノを言うですかい？」

「アンタがあと1年早く野球やっていたら葵じゃなくアンタに任せていたわ。でも、半年ばかりかじっただけのアンタに任せる気はないわよ。今はアンタより葵の方が格上よ」

「へーへーわかりましたよ。天才的ボクのポジションは一番ショートで妥協しますよーだ」

「アンタ、何しれつとポジションと打順と天才とか言っちゃってるのよ」

などと、たわいもない話にも聞き取れることもないのだが。

「ところで、アンタに振った仕事は順調なの？ 昨日の進捗状況まだ報告がないんだけど」

「おっと、ボクとしたことが……ヤンキーくんに執着しすぎて報告が

遅れてました。ボクに課せられたミッションなら大方順調ですよ。来週水曜日の野球同好会初ミーティングには間に合う手筈ですんで」「そう、順調なのね。なら問題ないわ」

裏・野球同好会。

それは如何なる手段を使つても球磨蒼士を野球同好会へ入部させるための同好会である。

この計画の発案者は黒瀬伊織くろせいおりという天文白金学園に勤務するちっちゃい先生。いつもエラそうでちっちゃい先生なのである。赤坂葵あかさかあおいに球磨の進路先をリークしたり、姫路千草ひめじちぐさに憧れの女子プロ選手は球磨の いとこ だとリークしたり、弟であるメガネくんには野球部作れと命じたり、茱白の無駄に有り余る財力で土地を購入して野球同好会のグラウンドを作らせようとしたりして暗躍をし続けていた。

この女に妥協という文字は存在しない。

「そういえば、ボス。来週のミーティングから参加する助っ人外国人がいるんですけどっけ？」

「ええ、そうね」

部員補給も妥協を許さない性格だ。

「ゲヘヘ、ボス。まだ、詳細聞かされてないんですけど、美少女ですかい？ きつとパツキンアメリカンガールなんですよね！」

「ゲヘヘって、アンタ……ほんと目ざといわこの変態女め」

「いやいやー、ヤンキーくんを追っかけ回しているボスに言われたくないですぜー。で、美少女なんですよね？ 名前はなんです？ 情報の開示を要求します！」

ボスはイラつとした。この凶々しさ、ほんとイラつとした。

そして、ため息も同時に出た。ボスがため息だなんて珍しいと言う

が、誰だっただけのため息の一つや二つはつきたくなくなる時もあるものだ。

「名前はソニア・ネイサンよ。あの子、留学の手続きもまだ済んでいないのに、ついにしびれ切らしちゃって琉惺学院へ単騎乗り込んでいったらしいわ」

「は？　今、なんと？」

聞き間違いであってほしい。

聞き間違いでなければあまりに面白すぎて腹が捻じれてよじれてしまう案件だ。

「だから、アタシに断りもなく道場破りをしに行ったらしいわ。光葉から、そう連絡があったのよ」

「あはははははははー！　バツカでーい!!」

「洒落にならないわよ、まったく……」

裏・野球同好会は暴走していた。

〇〇五〇 Eなんていらぬ

球磨雪那は琉惺学院高等学校にいる。

なんか、ちつこいのにエラそうな女性にそう言われた。自称、ハイスクールティーチャーだとか。

その高校は甲子園出場常連校らしく、誠か嘘かとある女子選手が出場してから常勝無敗の高校になったそう。日本人なら誰もが知っているそう。

その情報を元にソニア・ネイサンは海を渡り日本へやってきた。

アメリカにも数多のピッチャーは沢山いる。これからも強者といくらでも戦えるだろう。だが、異国で特定のピッチャーと対戦すると、ソニアがアメリカに身を置いた場合、そのドリームマッチが次何年後に叶うかなんてわかったものではない。

ソニアは雪那と対戦したことが一度だけある。だからこそリベンジを望んだ。

U-15の世界大会でアメリカは日本に勝利した。だが、気持ちでは誰もが負けたと感じたかもしれない。日本の先発ピッチャーと二番手は、良くも悪くもこの大会レベルだった。未来のメジャーリーガー候補と謳われるソニア達と戦えるレベルの者たちであり、ただソニアの方がほんの少しだけ実力が上だっただけの話にすぎなかった。彼らの投げる球を打てない道理はなかった。

しかし、あの少女だけは話が違った。

ゲームは終盤、残りの3イニングに登板したピッチャーが雪那だった。

打席に立ったソニアを含めた9名は誰一人として少女の球を捉えることができなかった。文字通りの意味でバットにボールが当たらない。ただの一球ですらバットにかすりさえしなかったのだ。空振り三振。見逃し三振……

日本にあんな早い球を投げるピッチャーがいることに衝撃を受けた。未来のメジャーリーガー候補選手の中にも早い球を投げる者はいるが、皆が全球ストレートで三振になることは初めてのことだった。

た。

未だに思う。何故、あんな恐ろしく早い球を投げるピッチャーが3番手だったのかソニア達にわからない。誰がどう見ても少女が日本のエースだと思った。出し惜しみされたのか、我々を甘く見られていたのか、と予想もすれど日本チームの真意はわからなかった。あとにして分かったことは、良くも悪くもこの大会で少女が登板したのはあの3イニングだけのことだった。

その3イニング、少女が登板してからアメリカチームに追加点を取ることはできず、逆に少女の圧巻のピッチングに触発された日本チームが勢いを増しアメリカチームを苦しめ追い込んだ。それは事実、球磨雪那という選手のたった3イニングの投球でアメリカチームに屈辱とプライドを傷つけたということだろう。

誰かは言った。「あの少女が3イニングだけの登板で本当によかった。先発からの当番であれば我々は立ち直れなかっただろう」と……ソニアはあの時のことを忘れはしない。

球磨雪那という存在を知ってしまった。あれが少女の全力でもないことと、冷めきっている目をして自分たちを見ていたことを忘れてはならなかった。

あの目は自分たちを好敵手として見ていないのだから。

だから、ソニアは海を渡って日本へやってきた。己のプライドのために、雪那にソニア・ネイサンという好敵手がいることを証明するためにリベンジを誓った。

「たのモー！ セツナ・クマはいますカー！ ワンオンマッチ・プリーズ！ ワンオンマッチ・プリーズ！」

さて。

遠路はるばる海を渡って日本へやってきたソニアは、我慢できず常勝無敗の王者・琉惺学院へ訪れた。そして、お昼休みであろう今を好機と雪那に挑戦状を叩きつけるのであった。

他校とのトラブル云々の話は一旦置いて。

ソニアはジャパニーズ・コミックのよくある好敵手ライバルの登場シーンを演出した。そして、一打席勝負をもちかけ、強い奴が他校にいる、自分という存在を相手に知らせ、次戦う舞台は試合での流れに持つていこうとした。

しかし、自分の思い通りにならないのが世の中である。

「なんや、あれ？ 雪那、なんかおもしろいのん来とるでー」

「雪那様。いかがなされますか？」

「キャハハつ、逆らう奴はいつものようにキルキルベイバー！ キルキルベイバー！」

校舎の屋上でランチを取る女子グループがいた。

皆まで言わずも、雪那のグループである。両手に花な雪那以外は、それぞれ各々が好きな場所でくつろいでいた。狂的な歌を口ずさみフォークに弁当のおかずをぶっ刺し口に運ぶ者がいたり、金網のフェンスから下をのぞき込み招かれざる客を面白半分眺めている者だったり、雪那に弁当のおかずを「あーん」してあげる者がいたり。やりたい放題、ここ屋上は彼女たちの独占状態であった。

「美少女かしら？」

美少女以外は興味なし。と言っているようにも聞こえた。

「はい、雪那様お好みのとびきりの金髪外国人でございます」

「貧乳かしら？」

「いえ、目測ですがE以上はありそうです」

「ふーん……」

それを聞いてしまった雪那はつまらなさそうに、右側の美少女からおかずを「あーん」してもらおう。それを味わい吟味し優越感に浸ると一分。

今も下からは「勝負してくだサーイ！」とソニアの声が聞こえるのだがスルーして。

しびれを切らした関西弁を喋る少女がもう一度聞いた。

「で、どうすんのや？ アレと勝負するんか？」

「しないわよ。だって、勝負してもつまらなさそうでしょ」

「ウチはけっこう面白いと思ってんけどな」

雪那にブツコロされる金髪外人美少女とかレアやん、と関西弁の少女は悪い顔する。それも見たことある顔なら尚更だ。遠路はるばる海を渡ってきた美少女なんてレアでしかなかった。

「まあ、どの道タイミングが悪かったわね。どうしても位置的に姉さんに先を越されて獲物を横取りされるもの」

「あーそれな。やっぱり東雲先輩の目の届かない放課後、2軍のグラウンドで遊ぶのが一番ええよな」

「えーキルキルベイバーしないのー!？」

自分、命拾いしたな……と関西弁の少女は笑う。

確かに、下をもう一度覗くと金髪外国人の隣によく見知った先輩がいた。野球部の先輩が道場破りを捕まえていた。

この学校で知らない者はいない。

金髪外国人はそのまま先輩に連行されどこかへ行ってしまった。

これは笑える。

「Eなんていらんわ。今、私が一番欲してるのはA以下の子よ、ソニア」

「一度も下見てないのに名前当てよった。エスパーか、自分」

「あら、ある程度予測できるじゃない。私のこと知っても尚勝負しかける金髪外人巨乳美少女。そして、どこかで聞いたことのある声。遠路はるばる海を渡ってやってきたであろうEカップの美少女は、私が

顔と名前を覚えているかぎり彼女ぐらいよ」

「なんちゅう読みや」

ソニアの誤算。それは自分のバストがEカップだということ。

雪那のお眼鏡にかなわず相手にされなかった。

○

ソニアとネイサンは連行された。

道場破りをしようと雪那の名前を呼び続けていたら、金髪美少女に連行された。自分も金髪美少女という自負が無きにしも非ずだが、彼女はなんというか自分とは違いオーラがあった。

「忠告。雪那と非公式で勝負するのは避けた方がいい」

ここは学校から一キロ離れたところにあるグラウンド。住宅地の中にひっそりとたたずむ市民グラウンドと呼ばれるところだろう。勝手に入って怒られるんじゃないかと思ったソニアだが、先ほど自分が何をしようとしていたのかすっかり忘れてしまっている。肝心なところの記憶は抜けているようだ。

ちなみに、ここは秘密の練習場として琉惺学院の生徒である彼女が顔パスで利用しているグラウンドである。自宅からも近い。だから、怒られるような問題は普通起きない。

お互い自己紹介もおいおい、本題に入っていた。

「ソニアはどここの学校の子？」

「ワタシは天文白金ハイスクールの転校生デース」

実はソニア、転校生という響きに憧れていた。だから、留学生とは言わなかった。

「天文白金（てんもんしろがね）……」

「ユーは知っていますのですかー？」

「うん。弟のいる学校。従弟だけだ」

「オオッ、ユーのブラザーがいるのですかカー！ これはちゃんと挨拶しないとデース！」

「うん。とても世話のかかる子。でも、とても強くてカツコイイ。仲良くしてやってね？」

「勿論デース！」

全然本題に入っていなかった。だが、雑談もそこそこにして。

「ソニア。話は戻すけど、雪那は今とても反抗期。本当は喧嘩売らない方がいい。だから、非公式でどうしても戦いというなら、私と勝負しよ」

「ユ、ユーとですかー？ ホワイ??」

「うん。私に勝ったら雪那と勝負しても大丈夫だと思うから」

「ンー?? チョット待ってくださいサイ。ユーに勝てたらどうしてセツナと勝負しても大丈夫って言えるんデスカー？ 日本語ムズかしいデース」

「だって……」

そう言っつて、琉惺学院の少女はグラウンドに作られたマウンドまで移動した。制服のままだが、グローブをいつの間にか装着して左手でボールを転がし遊んでいた。

気づいた時にはバッターボックスにはバットが転がっていた。

「私がああの学校のエースで最強だから」

だから、最強に勝てたら雪那にも勝てるということだ。

静かで住宅街の喧騒もそよ風によって運んで聞こえていたグラウンドの空気が一瞬にして張り詰めた。未来のメジャーリーガー候補の

1人と呼ばれたソニアならわかる。王者の威圧感を肌で感じた。というか、空気がピリピリし過ぎて、心なしか目の錯覚なのか、そよ風のせいだろうけど少女の金色の髪の毛の先っちょが少しほど逆立っているようにも見えた。

「私ならいくらでも相手にしてあげる。好きなだけ、心ゆくまで勝負しよ」

「オー、ジーザス……」

琉暉学院を常勝無敗の高校に導いた最強のエース・東雲光葉しののめみつばとは彼女のこと。

このあと、ソニア＝ネイサンは日が暮れるまで強制的に勝負をさせられ：何度も、何度もボロカスに負けた。

〇〇六〇 手、繋ぐ？

昔の夢を見た。

「オレ、もう野球やめるわ」

「兄さん。2人で頑張っつていこうって決めたばかりじゃない」

そう決めたはずだったんだがな。足がイカれちゃった。

「約束守れなくてごめんな」

「だったら私も野球しないわ。兄さんの怪我が治るまでいくらでも待つわよ。別にプロを目指さなくなたっていい。兄さんと野球できるならどこでも。だから……だから、そんなこと言わないで……」

親父が他界して野球を少し嫌いになった。

母親が俺たち兄妹を裏切っつて知らない男とどこかへ蒸発して、さらに野球が嫌いになった。

兄妹は過去を乗り越えようと誓ったはずだった。

この試練も乗り越えて『球磨兄妹』の名を天国にいる父の所まで轟かせるぐらい球界で暴れようぜ！と約束したはず。

でも、ひき逃げされた時に悟っつてしまった。

ヒーロー気取りで女の子を助けても野球の神様は称賛してやってくれない。それどころか怪物と忌み嫌い見捨てたんだ。

「オレがやめてもお前は続けろよ」

「誰が私の球を捕るのよ。兄さんしかいないでしょ……」

妹を泣かせてしまった。

「オレじゃなくても、どこかに探せばいるだろ」

「私は、兄さんとじゃなきゃイヤなのよ……」

妹の差し伸べる手を払いのけてしまった。

「オレも頑張ろうとしたけど、またあんな目に合うってんなら野球やらない方がマシだろ。だから野球なんてどうでもいい……」

苦渋の決断だった。ここではそう言うしかなかった。妹を見放すことが、自分のためではなく妹のためだと信じた。本当にそう思った。

「わかったわよ、このウジ虫が……」

「お、おまつ、兄に向って……っ!?」

「だって、そうじゃない。いつまでも、うじうじうじうじうじうじして
るのだから。それともクソ虫と呼んだ方がいいかしら?」

「えー……」

何も言い返せなかった。

「もうオオグソクムシの見舞いも来ないし家でも顔みたくないし話しかけもしないわ。旅行も一緒に行かないし勉強も教えてやらないし一緒にテレビも見ないし遊んであげないしお風呂も1人で入れるし兄さんが入ったお湯なら1度抜いて入れ替えてやるし夜怖くてもトイレ1人で行けるしベットも自分のを使うしそれでカワイイ妹と一緒に寝れなくなったこと後悔すればいいのよだからキャッチャーは自分で探します。なので、どうか二度と野球してくれないでちょうだい。このウジ虫!!」

「……………」

それは小6の冬のこと。

球磨蒼士が野球をしなくなった理由は、もうお分かりいただけただろう。

○

4月14日土曜日の夕方。
いところの三女からこんなラインが来た。

『最近できたスポーツショップに行ってみたい』

しのめみつば
東雲光葉。

東雲姉妹の三女であり、球界女子最強の1人と謳われている。
常勝無敗の王者・琉惺学院の3年エースで二刀流使いで公式戦通算
全打席安打の記録ホルダーの持ち主である。

控え目に言ってるチート。

自称、スーパースパイ人を超えたスーパースパイ人だそうだ。

聞いた話では、すでにプロ野球全球団からドラフト前にも関わらず
一位指名されているとか。意味がわからん。

各球団から契約金がどれぐらいだとか話を持ち込まれたり、貢物を
送られたり、何かと熱烈なアプローチをされて光葉の争奪戦は1年前
から始まっているそう。

175cmの恵まれた長身だからこそ、あの身体能力も頷ける。

モデル並みのスタイルというが、東雲の長女に連れられてモデルの
仕事で小遣い稼ぎをしたり、スポーツ道具・用品のスポンサーになっ
たり普通の高校生とは次元が違う人生を歩んでいる。

物静かであり人前ではあまり自己主張が強い性格ではないため、
モデルの仕事とかは不安ではあったが、彼女なり上手いことしている
そう。これについては後悔していないのでいいのだろう。

球磨にとって自慢の姉の1人だ。

「手、繋ぐ？」

「もうガキじゃねーんだけど」

普段と変わらないやり取り。両親がいなくなった兄妹の面倒を一

番みている三女の、かかせないやり取りである。

今日はツインテールにしているようで、その金の髪を人差し指でくるくるさせていた。光葉は練習後に一度、自宅に戻りシャワーを浴びたらしい。シャンプーのほのかの香りがする。「におい、どう？」って聞かれて、それは汗のニオイがまだ残っているかどうか聞かれていることだと思い、球磨は「別に」とだけ答えた。もちろん、凄く不満げな顔をされた。

時刻は午後7時。2人は待ち合わせ場所に集合して、目的のスポーツ店へ訪れた。海外のブランド店らしい。名前はあんまり聞かないがな。ただ、建物はとても大きく東京ドーム3個分だとか。

「学校は慣れた？」

「まあな」

「友達はできた？」

「まだだな」

「彼女は？」

「いねーよ」

「そ。よかった」

「よくねーよ」

この店、ナイキンとかミゾノとかのブランド商品は一切置いていないらしい。

マイナーなブランドの下剋上をテーマにしているだけに、よくわからないブランドが多い印象だ。寄せ集めの烏合の衆。それはまさしく、天文白金の野球同好会みたいだなと球磨は思った。

別にどうでもいいけど。

そんな彼の心境などしらず、姉の光葉は珍しいスポーツ用品を物色しながら、弟に彼女がいないことを聞けたので安堵していたりする。

「この前、蒼^{そう}くんと同じ学校の子が道場破りしにきたよ。野球同好会のメンバーって言ってた」

「は？ 誰が？」

話題は3日前の珍事件。光葉も弟だからか饒舌になる。

「ソニアはネイサンって子。雪那にリベンジしたくて、アメリカから転校してきたって」

「それで？」

「お昼休みだったから私が相手した」

「まあ、それが正しい判断だよ。つーか、学校問題にならなかったのかよ」

「だから、私と勝負してその事実をもみ消した」

「ちよつと何言ってるのかわからねー」

この三女はチートだから、いつものことだと球磨は適当に流した。

「どうせあのチビの差し金だろ」

「伊織さん、制御できなかったみたい」

「あつそ」

「とにかく、ソニアと勝負した。日が暮れるまでずっと」

「そいつは雪那より惨いことしたな」

「うん。格上の实力を見せてあげた」

「ご愁傷様だ」

「そして、ソニアの師匠になった」

「弟子作るなよ」

「センスの塊みたいな良いバッターだよ」

「で、師匠は弟子の才ある芽を摘んだってわけか？」

「それは違う。ソニアのバッティングの癖を把握しただけ」

「一緒だよ。もうそいつはミツバ姉の球は打てねーよ」

「今のままだとね」

次に公式戦で光葉と勝負してもソニアは白金学園の戦力にならな

いだろう。

球磨は従姉のチートぶりをよく知っているからそう言えるのであった。

東雲光葉は打者の癖をピッチングから読み取り、打たせて取るピッチングを極めている。打者の癖を完全に把握したとなれば、どこのコースをどの順番で突いていけば、敢えてピッチャーフライにして討ち取ることも朝飯前でやってのけるのだ。

それは東雲光葉だからできる芸当。故にチート。

だから、ソニアは光葉と勝負し過ぎてもうヒットを打つ可能性は限りなくゼロになった。

もし、光葉に癖を把握されても尚、打つことができるのは進化し続ける者だけだ。

「でも、あの子はきつと強くなる」

「そか」

「心配？」

「は？　なんで俺が」

「蒼くんもそのうち野球同好会へ入る予定だから」

「勝手に入る予定にするな」

「でも、私は最後の大会、蒼くんとも対決したい」

「ミツバ姉に言われてもしねーって」

「うん。そうだったね……」

光葉は対戦しないとと言われてしよんぼりした。

「で、この店の品物は種類は豊富だわ価格も安いそこそこ良品質。何か買っていくか？」

「まだ検討中。蒼くんは何か欲しいものある？　グラブいる？」

「いらねー」

球磨はあの日に野球しないと誓った。

たとえば、ちよつとブラコンが過ぎる長女の頼みでも、たとえば大好きな次女に期待されても、たとえば面倒見の良い三女にどれだけお願いされても、こればかりは意地でも決意は動かせない。

もう、自分に野球をする資格はない。

あの日を境に妹の人生を最悪なものに変えてしまい、彼女を取り巻く環境を激変させ、犠牲者をも出した自分に今さら野球をすることは許されないはずだ。

ただ、球磨にとって光葉の存在は大きかった。

「蒼くん、バットもいらナイ?」

「バットもだ」

「スカウターは?」

「なんでそんなオモチャがあるんだか。試合に付けちや駄目だろ」

「ううん、非公式ゲームならオツケーになったらしいよ」

「マジで? 付けてる奴らいるの?? アホなの??」

「蒼くんの選手能力は53万……だと……っ!」

「お、おう……」

「流石だね」

「いや、その基準がわからねーよ」

「ここに書いてある。一般の高校球児の基準値は平均“1000”前後だって」

「じゃあソレ故障してんだろ。いくらなんでも差がありすぎだ」

「蒼くん、チートだから仕方ないね」

「いや、ミツバ姉に言われたくないから」

などと言つて、三女からスカウターを取り上げた。なんだかんだ、球磨もこの一連のやり取りを楽しんでるみたいだ。

「まだ、見て回ってもいい?」

「まあ、いつも世話になってるしな。どことなりと」
「ありがと」

こちらこそ、いつもありがとな……と球磨は心の中でつぶやいた。
ちなみに、三女の選手能力は520万だった。
絶対に故障だと信じたい。チートえ。

〇〇七〇 集いし烏合の衆

モテる者とモテない者の差ってなんだろう。

ここ天文白金学園は元女子高だけに女子生徒の人数は多く約8割が女子生徒であり、男子生徒にとっては夢のような学校だ。1学年、A～F組までクラスがあり、男子生徒は各クラス多くて5名ほどバラバラに在籍している形になる。この配慮は数少ない男子たちを一か所に集中させて団結力を高めさせない意図があつたりするのだが、今は置いといて。1クラス約40名だとすると男子を除けば女子35名と夢のような教室となる。

喜びたまえ男子諸君。

しかし、現実とは厳しく童貞どもの夢は儚く散つてしまうものだ。とある男子生徒にインタビューをしてみたところ「うう、クラスの女子たちは俺たち男子をウジ虫を見るかのような目で見るんですガクブル」と肩身が狭い学園生活を送っているようだ。勿論、それがすべてだとは言わないが、何か勘違いしてモテたくて女子の多いこの学校へ入学してきた者たちにとってツライ環境なのは確かであった。

「馬渕氏。おれ達ってなんでモテないんだ?」

「元女子高でバンド組んだら絶対にモテると思つたのになー」

だよなー、と投げやりに相槌をうつ男子生徒は2年D組の三船小太郎みふねこたろうという。そして、バンド仲間の2年D組の馬渕学まぶちがくと放課後の屋上で手すりに背中を預けて空を見上げて愚痴っていた。

雲一つない青い空が憎たらしいらしい。

「おれ達の何が悪いんだ? やっぱ顔?」

「ビジュアルつったら、そのロン毛が駄目なんじゃ……?」

「馬渕氏の歌詞のセンスもちよつとアレか……」

「そういう三船氏は音楽に対する愛が足りてないだろ……」

「はあ………」

天文白金学園でバンドしたらモテる。それは一個上の先輩たちを見て確信したことだ。バンドってやっぱモテるじゃん!と意気揚々と自分達もバンドを結成して約1年。ファンと言ってくれる女子生徒が未だにいない。何故かモテない。

『Re:エンピレオ』なんてイカしたバンド名だと彼らは自負していた。

「俺達の歌じゃ女の子のハートに響かないのか……」

「そんなに俺達イケてないのかな……」

「モブチームはアウトオブ眼中なんだろ。結局、世の中『顔』なんだ!!」

「赤坂さん、かわいいよー。はあはあ……」

「……………」

三船と馬渕よりちよつと離れた所にいる、もう1人のバンド仲間・鹿苑隆史ろくえんたかしが何か言っている。とりあえず、ひとまずスルーした。

「馬渕氏ー。マジで次の新曲どうすつかなー。モチベ上がんねーべ」

「だなー。彼女できたらやる気出るんだけどなー」

「ぐふふ、姫路さんもかわういねー」

「……………」

彼女できたらやる気出そうだが、そもそも女の子の心に響く歌ができないからファンもできないわけであって、結局彼女もできない。女心もわからないから、それだと良い歌詞もできない。よくある悪循環のスパイラルだべさ……などと、また感傷に浸りたかったのに、ちよつとヤバイ奴がいるからそろそろスルーできなくなった。鹿苑は何を言っついていやがるんだ。

「おい、あのバカさつきから何してんだ?」

「三船氏。あれは野球同好会の女子たちがビラ配りするのを眺めてる

「あー、あの元気の良い1年達かー」

確かに2人ともカワイイが。おれ達のファンになってくれないかなーとか思っっちゃたりもするのだが、彼女たちには他に夢中になれるものがあることは三船にもわかっていて。それに引き換え自分はバンドに夢中なれてるんだか、自信はなかった。

「そういうば、三船氏って私立の中学で野球やってたんだべ？」

「あー軟式な。でも、やめた。一個下に恐ろしい女がいて、やめた」
「ふーん」

「今度、その恐ろしい女の話でもしてやるよ。あ、いや、やっぱりやめておこう。どこであの女の手先が聞いているかわかったもんじゃねーべ」

「手先って……その女子ナニモンだよ。気になるじやまいか」

「いや、いいんだ。忘れてくれ……。それよりもだ、おい鹿苑！ お前じゃ無理だつて！ あの子ら、誰にご執着か一目見てわかるべー！」
「月とスッポンポンだよな。わははっ」

「スッポンポンって何なのさ。笑わないでくれるかな、見るだけならタダだろー」

「いやー、あんまり度が過ぎるとあのイケメンヤンキーが黙ってやしないんじゃねーべ？」

「ぐっ、それは困る。まだ死にたくないよ……」

「つーか、エロい目で見なければいいんじゃね？」

もう彼らのなかで野球同好会の女子ズはヤンキーの女だと認識していた。

「あつ、ちょっと待ってー！」

「なんだよ、鹿苑氏。あんまり大きい声出すなよ、下にいる女子たちに聞こえてしまうべ」

「まー俺たちは別に待つてないし好きだけどうぞー」
「いやいやいやいやちよつとこれビツクスクーブだよ！ あんな外人この学校にいたっけ？ いや、急遽留学生が来るって噂されてた子なのかな!? ロリっ子じゃないけどあの子も素敵だ!! 僕生きててよかったー!!」

「駄目だこいつ。しかし、気になるな。どれどれ……」
「やれやれだべ」

鹿苑に言わせるほどの逸材らしい。馬淵も気になって身をよじり下をのぞき込んだ。

野球同好会の女子2名とメガネくん1人。どうやら鹿苑はメガネくんの存在はどうでもよくスルーらしいが。で、その近くに金髪美少女がいるの発見した。高身長でいかにも外人だと思えるスタイル。とてもフレンドリーに下校する生徒たちにビラを配っていて、その笑顔がたまらなく素敵だった。

「良き」

おっぱいも大きい。

「お、俺はあの子が、好きだー!!」

「お、おい、そんなにか。俺にも見せろ！」

思春期男子には逆らえない性さがある。たとえ女子に軽蔑されてもウジ虫のような目で見られても男には確認しなければならぬ瞬間ができる。それが今だと、三船も振り返り下を覗きこんだ。あ、馬鹿2人が叫んだせいで金髪美少女にこつちを見上げていた。ヤバい、と思ったがもう遅い。ヤンキーにチクられて俺たちは校舎裏に呼び出しくらってブッコロされるんだ、と覚悟を決めようとした。

だが、その金髪美少女はことあるうに三船達にウインクしたのである。

「おお、女神よ」

もう、それだけで十分だった。何か報われた気がした。何に報われたのかは三船にもわからないのだが。

彼らは小心者だ。自分たちの存在がバレた。たとえウインクされようとずっと眺めている勇氣はなかった。というか、ウインクをしていただいただけで十分だった。彼らは下を覗きこむのをやめて、また手すりに背中を預けて腰を下ろした。

なんだから、初めて得る高揚感だった。胸の高まりが止まらない。

「な、名前なんていう子なんだろう？」

「おい、どうするべ？」

「あの子に歌をプレゼントしたい！」

「ああ!!」

「馬渕氏、それいい！ よし、次の曲はあの子にプレゼントする歌を歌おう!! もしかしたらファンになってくれるかもしれないねーべ!!」

「なんだかインスピレーションがどんどん湧いてきたぞー!!」

「女神のウインクってフレーズを絶対に入れるべ!!」

『Re：エンピレオ』は女神の祝福を受けて生まれ変わるかもしれない。恋は不思議な力をくれる。今なら絶対に良い曲を作ることだってできるさ。そう思っていた時期が彼らにもありました。

「後輩諸君!! 話は聞かせてもらった!!」

「誰?」

さて、彼らの物語は急展開を迎えることになる。

「ボクは裏・野球同好会のマシロ先輩だぜ。お見知りおきたまえよ」

カエルの被り物かぶったヤバイ先輩に目を付けられた。こうなつてしまったが最後、自分たちは碌な目に合わないだろうと覚悟せざるをえなかった。もしかしたらあのヤンキーの差し金かもしれない。すでに、金髪外人もヤンキーの女だったからこそ、刺客を送り込んできたのかもしれない。

もちろん、それは彼らの思い過ごしでしかないのだが。慈悲に満ちたマシロ先輩はそんなことしない。

「キミ達、彼女に歌を届けたいんだって？」

「は、はい。覗きしたことは素直に謝ります。でも、俺たち彼女に歌を届けたいんす」

「うむうむ。誰かに歌を届けたいと思うことはとてもいいことさ。されど、今のキミ達のモチベで作ったとしてもきつと彼女に想いは届かないだろうぜ」

「なっ、なんでそんなことをがわかるんすか！ やってみないとわからないっすよね！」

「そうっすよ。俺達だって本気で1年間バンドやってきたんす。こればかりは先輩に否定されたくありません」

「そ、そうだー……です。はい」

「だが、キミ達は1年間のバンドを本気でやってファンはできなかったんだろ？」

「「グサーツ!!」」

まさしく痛恨の一撃。

彼らのライフはゼロだ。マシロ先輩から突き付けられた言葉はそれぐらいの威力があった。言われてみて改めて気づかされた。確かにそうだ。彼らはモテるために1年間やってきたが何も収穫なんてなかった。ファンの1人さえできなかつた事実が重くのしかかる。その現実から目を逸らしていたから放課後の屋上へいたということなのだから。

「キミ達の本気って何？ それは本当に本気だったのかい？ 今の現状を見ても本気と胸張って言えるならもうバンドをやめたまえ。ボクがキミ達に引導を渡してやってもいいんだぜ」

「「そ、そんな……」」

「でも、キミ達はそれでもモテたいんだろう？」

「「モ、モテたいです！」」

「なら、モテ男になるために覚悟を決めて丸坊主にでもしてみせろ！」

そして、野球同好会に入ることをおススメするぜ！」

「「へ……？」」

マシロ先輩の強引な勧誘により、彼らは野球同好会初ミーティングに参加することになった。

○

そして――、

野球同好会の初ミーティング当日。4月18日水曜日、時刻は16時半。会場は理科室を借りて行われ、カーテンで閉め切っては少し薄暗い教室に20名もの生徒たちが集まっていた。

赤坂葵あかさかあおいや姫路千草ひめじちぐさ、メガネくんと野球同好会初期メンバーは勿論

のこと、裏・野球同好会の有栖茱白ありすましろもいるし、ソニア・ネイサンもいた。他にも茱白が勧誘した坊主頭の三船たちの姿があったり、ソフトボール部をやめようか迷っているらしい女子や、ヤンキーを餌に釣られたつばいステータスの高いリア充女子がいたり、初顔の者もいれば見知った顔の者もいた。

別に野球部が存在しなくても困らない学校でよくもまあこれだけの人数が集まったものだ、と黒板前で生徒たちの品定めをしている、ちつこくて偉そうにしている女子監督は関心していた。チュッパチャプス的なキャンディーを口の中で弄び、唇から飛び出した棒を上下に揺らす。

時計の針が1分刻み、ミーティングを開始した。

「さて。ようこそ、天文白金野球同好会へ。アタシは顧問と監督を務める黒瀬伊織くろせいおりよ。よろしくね」

「「「「よろしくお願ひしまーす!!」」」」」

「この同好会はゆくゆくは部として正式に活動するわけだけでも、ここではアタシがボスよ。アタシがちつこいからつてナメたマネは許さないし、アタシのやり方が気に入らなければどうぞ辞めてくれて一向にかまわない。先にこのことを伝えておくわ」

仲良しこよしをする気は一切ないということだろう。

「それじゃ、さっそくだけどここに集まってくれた皆に最終試験を受けてもらうわ」

「さ、最終試験!?!」

どよめきの声がやはり起こる。そんな話聞いていないとか、そんなの初心者には絶対無理じゃんなどと、、、

「あの、質問よろしいでしょうか?」

20名集まった中で一番イケメンそうな2年の男子生徒が挙手をした。さわやかイケメンとはこういうのをいうのだろうか……しかし、伊織のタイプではない。メガネくんや三船達が対抗意識を燃やそうとしているようだが、スルーして彼の質問を聞いた。

「あら、何かしら?」

「その最終試験というのは、能力テストか何かでしょうか?」

「だとしたら?」

「ここに集まった生徒の中には野球経験がない子も多いと思います。勧誘された時にそんなことは一切知らされませんでしたし、ポスターやチラシにも最終試験とは書かれていませんでした」

「それで？」

「み、未経験者にとって試験はハードルが高いんじゃないでしょうか。赤坂さん達に熱弁されて野球に興味もって、今日このミーティングに参加した生徒たちへの配慮も少しは考えてもらえたら助かるのですが……」

「そもそも、アタシはまだ最終試験の内容、一言も喋ってないんですけど？」

「え、それは……」

「え、それは……じゃないでしょ。アタシ、ついさっき言ったばかりよね？ アタシのやり方が気に入らなければ辞めていいって。どうぞ、お引き取りいただいてもけっこうなのよ、イケメソ君」

「すつ、すみませんでした……」

伊織はつまらなさそうに彼を見た。女子生徒に良い恰好したいだけなのか、それとも自分が入部したいから試験レベルを下げるよう提案したかったのか、彼女にとってどちらでもいい話だ。

「じゃあ、ねーちゃん。俺からも質問していいか？」

「何よ？」

「能力テストじゃなければ、何させる気なんだよ??」

「もうメガネは黙ってなさいよ。馬鹿がバレるわよ」

「ひ、ひでー」

「というか、馴れ馴れしいわね。アンタ、家帰ったら死刑ぶっころね」

「そんなバカな……っ!?!」

黒瀬姉弟の漫才は他所でやっていただきたいのだが。ちなみに、この会話を要約すると学校で「ねーちゃん」と呼ぶなど姉が弟に注意しているのだ。きつと。

「あ、あの一、私も質問いいですか？」

「ん？ 千草、何かしら？」

「その最終試験ってマネージャー志望も受けなければならぬんですか?」

「ええ、そうよ。ここに集まっている20名全員よ」

「あう……」

しょんぼりする千草。野球同好会初期メンバーも知らされていなかった最終試験なんて、受かる自信が千草にはなかった。肩を落とすしかなかった。

「というか、アンタたち少し勘違いしているようだから訂正させてもらうんだけど、別に能力テストや筆記テストをするつもりでもないわ。ジャッジするのもアンタたち自身」

「ボス、それはどういう意味なのデスカー?」

「それもすぐにわかるわ」

そう言つて伊織は黒板の上に取り付けられたプロジェクター用のスクリーンシートを下ろした。椅子の上に立って、背伸びして、丸まったシート先の先っちょにある輪っかに指をぎりぎり引っかけて下ろしていった。続いて、一番前のテーブルに置かれていたプロジェクターがシートに照明を当て、それからPCで何やらキーボードをカタカタと慣れた手つきでタッチしていく。

「マシロ、葵、本当にこの子達にも見せるわよ? いいわね?」

「心の準備はバッチリできてますぜー、ボス」

「はい。私も大丈夫です。お願いします」

伊織は茱白と葵に確認を取り、再生ボタンを押した。

これから何かが始まる。能力テストや筆記テストより過酷な試験になるかもしれない。ただならぬ異変にいち早く感じ取ったのは千草だった。葵の隣に座っていたからだろう。いつも一緒にいるからわかる。彼女の手が震えていた。

「それじゃ、甲子園を目指すアンタ達にこれから一本の試合の動画を観てもらおうわ。リトルシニアのとある試合よ。この試合にアタシ達が倒さないといけない敵がいるの。甲子園を目指す上で避けて通れない大きな壁よ……だからアンタたちはこの試合を見て野球同好会に本当に入部するかどうか、覚悟を持って決めてちょうだい」

黄昏時エスぺラント VS 七森ブルースの試合が再生された。

〇〇八〇 黄昏町エスペラント VS 七森ブルー
ス

白球はキャッチャーミットに吸い込まれていく。

バットは空を切り三振になる。

スリーアウトだ。

少女は小さくガッツポーズをした。

「ナイスピッチング！ 赤坂!!」

黄昏町エスペラント VS 七森ブルースの試合は最終回を迎えた。

七森ブルースのエース、赤坂^{あかさかあおい}葵は体力の全てを削って最終回まで投げきってみせた。失点は3点。全国レベル相手に十分すぎる健闘ぶりだ。人一倍奮闘したのはいうまでもない。もちろん、バックにはこれまで一緒に戦ってきた心強い仲間たちが守ってくれたから最小限の失点で抑え切ってみせたのだ。

0 - 3 で、攻防が入れ替わる。

7回の裏、七森ブルースの最後の攻撃だ。3点差をひっくり返すことは容易ではない。これまでチームはノーヒット。出塁できたのは時たま出るフォアボールだけである。葵はベンチに戻りタオルで汗を拭い水分を補給した。とても悔しい気持ちだが胸の内から湧き出るのがわかる。自分は体力の限界で次は投げられない。相手ピッチャーはどうだ。息も切らさず、未だに涼しい顔をしていた。どれだけバケモノなのだろうか。リトル時代から対戦を夢見てきた球磨雪那くませつなと自分のレベルの差はまだまだ埋まらないという事実が彼女に重くのしかかった。

「葵、大丈夫ですか……?」

「う、うん。大丈夫だよ……といっても、ちよつと流石に次の回は投げ

られないかな。だから、ここでサヨナラを狙うしかないよ」
「そう、ですね……」

隣に腰かけてきた（ありすつばめ）もわかっているはずだ。逆転するために必要な4点を取ることがどれだけ無謀なことかということ、もうこの試合で十分に理解できている。

「ストライーク！ バッターアウト!!」

まったく手も足も出ない。先頭の5番打者、そして6番打者があつという間に三振に終わってツーアウトになった。やはり、誰もあの怪物に勝てない。中学生で時速150キロはイカレてるとしか言いようがなかった。しかし、

「ド、ドンマイドンマイ！ まだまだ試合は終わってないよ！ 米田くん！ かつとばせー!」

最後まで絶対に諦めてたまるものか。

まだだ。葵は諦めなかった。まだ、チャンスは必ずあると声を出した。それに触発されてベンチに活気が戻る。これも彼女の一つの武器だろう。彼女のおかげで勇気が湧いてくるのだ。お通やムードにはさせない。何がなんでも出塁して最後の1球まで諦めない。これが七森ブルースの野球である。

ツーアウト、ランナー無し。最終バッターの米田に精一杯のエールが送られた。

「米田ー!! 監督命令だ!! 死んでも塁に出ろー!!」
「そ、そんな無茶なっ!!」

7番の米田はラストバッターだ。しかし、2人出塁できれば9番、葵の番が回ってくる。そうすれば、なんとか出塁して、1番の燕に

回って逆転コースを狙える。これしか黄昏町エスペラントに勝つ逆転勝利の方程式はなかった。

これまで、七森ブルースの幾度となく奇跡を起こしてきた。今回だってきつと奇跡は起きる。そう信じた。

「ボール、フォア!!」

ここにきて四球だ。

「え? まじ?」

「よく見た! 米田!!」

「もうけもうけ! 田中も次、ボール見ていけ! あいつ、コントロール乱れてきてるぞ!!」

「よく見ていけー!!」

ツーアウト、ついに、ランナーが出塁した。

これが最後のチャンスである。もしかしたら、もしかするかもしれない。七森ブルースの逆転劇が始まるのだ。そして、田中もフォアボールになるのは時間の問題だった。

「葵、あのですね……」

「燕ちゃん、まだまだこれからだよ!」

「……はい」

この時、葵は逆転劇のイメージをしていた。それしか脳裏になかった。隣で何かを話そうとした親友の言葉も想いも伝わらないほど、彼女は試合に集中していたのだろう。いや、全力のピッチングだったのだ。えらく疲労して一部の思考しかできなかつたのだろう。今は全力で田中のことを応援するということしか頭になかつたのだろう。次は自分の番なのに、ネクストバッターサークルに待機することも忘れてるほどに、

田中も四球になり、ツーアウト、二塁となった。

「おいおい、二者連続フォアボールってマジかよ!!」

「俺たちのチームってほんといつもこれだよな!!」

「おい、赤坂! 次、お前の番だろ!!」

「あ、そうだった……っ!!」

「あ、葵……ヘルメット、ヘルメット忘れてます!」

「あつ、いっけねー……てへぺろん」

「てへぺろんしてる場合かよ! お前、もう限界なんじゃ……」

「赤坂、だいぶ疲れ切っているな。いや、お前に次を託すしかないんだが、大丈夫か? 打席立てるか?」

まだ、息が整っていない。まだ、肩で息をしている。

だけでも、自分が打席に入らないといけないことは葵も理解していた。このチャンス、燕に繋ぐのは自分の役目なのだ。

「もうお前に頼るしかない。いけるか?」

「はい! 必ず出塁してみせます!」

葵は燕の方へ振り返った。燕は今にも泣きだしそうな顔をしていた。

何故、泣きそうな顔をしているのか葵はわからなかった。感極まったのか? 正直、葵は面をくらってしまった。行ってきますって言おうとした言葉が詰まる。ここで泣かれたら自分も泣きたくなくなる。

「葵、ごめんなさい」

「燕ちゃん?」

それはエラーのことを言っているのだろうか。

3回の表、あの燕がエラーをして、その流れから3点を失った。大きい失点だった。でも、自分たちはあの怪物ピッチャー率いる黄昏町

エスペラントに3点で抑えたのだ。誇りに思うべきだった。だから、葵が親友にかける言葉は1つのみ。

「燕ちゃん。この試合、絶対に勝とう!!」

「は、はい……っ!!」

そういつて葵は打席に立った。絶対に出塁してみせる。何が何でも。最悪、命がけてデッドボールをもらっても構わない。相手は制球が乱れてきているらしい。なら、自分にもチャンスは必ずあるはずだ。

(本当にコントロールが乱れている? あの人か?)

今にして思えば、葵はここで空振り三振になって試合終了にするべきだった。フォアボールも狙うな。デッドボールも狙うな。満塁も狙うな。そう自分に言い聞かせるべきだった。

打席に入ってからわかることがある。何故か、打席に入って意外と冷静になった自分がいる。

一見して、制球が乱れているようにピッチャーの球はストライクゾーンをとらえきれていないようにも見えた。第1球目をアウトコースをボール2個分外れた。第2球目はボール3個分高くて外れた。釣り玉だったのだろうか。続いて、第3球目はアウトロー、ボール1個分外れた。

驚くべきことに、今までまったく見えていなかった球筋が見えた。一見して、相手はツアアウトと言えど、このゲーム初めてのピンチを迎えているチームだ。下手に打たれて点が入るより満塁になってもいいからクサイところを突いて、空振り三振を狙いつつボテボテゴロで打ち取る算段なのだろうか。

しかし、らしくない。

球磨雪那はそんな小細工も必要とすらない程の剛速球を投げる。すでにプロの剛腕ピッチャーに匹敵するストレートを投げて我々中

学生相手から三振を十分にとれるピッチャーであるはずだ。

「ボール、フォア!!」

ありえない、ことが起きようとしている。

球磨雪那の乱調によりツーアウト満塁になり、一番バッターに打席が回ってきた。ここで一発が出たら逆転サヨナラだ。流れは完全に七森ブルースにあった。有栖燕なら必ず奇跡を起こしてくれると皆が期待した。これまでもそうだった。今まで七森ブルースを勝利に導いてきたバッターだ。逆転劇を幾度となく起こしたバッターだ。だから、本当に最後の応援がベンチ、観客席から聞こえた。

最終回ツーアウトになろうと、何があるかわからない。格上だろうが一瞬でも気を抜けば逆転してしまうことはざらにある話だ。球場の魔物が怪物に牙を向くことさえあり、絶対に負けるだろうと思っていたチームが奇跡を起こすことだってある。今のシチュエーションがまさにそれだ。

球磨雪那が暴投した。

「ワ、ワイルドピッチだ!! ゴー!! ゴー!!」

「いや、待て!! ランナーストップだ!! 戻れ米田!!」

ボールは後ろのフェンスを勢いよくバウンドして跳ね返ってきていた。

もし、ランナーがそのままホームベースに突っ込んだら、十分に捕球が間に合っていただろうしアウトになっていただろう。ランナーは命拾いして3塁へ戻ることができた。

「米田ナイスラン!! バッターもナイスンナイスン!! ピッチャー、崩れてきてるぞ!! 有栖、失投見逃すな!!」

確かにそうだ。ピッチャーは崩壊気味で失投も十分に考えれる。

七森ブルースの天才・有栖燕を信じるしかない。

そして、

「ファ、ファールボールっ!!」

「……………っ!?!」

カキンと金属バットから音が響く。ボールがバットの先に辺り、一塁側ベンチへ転がっていく。相手ベンチのチームメイトの誰かが嘘だろと声を漏らす。

「あ、有栖がゾーンに入った……………」

誰かが言った。ふざけて言っているように聞こえるが本当にこの時、燕は初めてゾーンの扉をこじ開けたのだ。

漫画とかでよく使われている「ゾーン」だが、一流のスポーツ選手が世界レベルの試合で時たま極限状態を経験をすることがある。超集中状態でプレイすることで、圧倒的にハイレベルなパフォーマンスを発揮することが可能といわれている。例えば、ボールや人が、ゆっくり動いて見えたり、止まって見えたり、時間感覚が歪むことがある。また、野球やテニスボールが、スイカくらい大きく見えることもあるらしい。

球界を代表するなら東雲三姉妹がいい例だろ。長女なんて特にプロ野球観戦でゾーンに入っている所がよくわかる。三女は、チートすぎてゾーンをさらに超えたゾーンに入れるとか意味不明なことをたまに口にするのだが。

有栖もゾーンに入るほどの才覚があったということだ。ほら、その証拠にわかりやすく青白いオーラが薄っすら見える。球界でゾーンに入った者によく見受けられる現象だ。

「あいつ、マジでか!? この土壇場で覚醒した!?!」

「ゾーンなんてプロでも一握りしか使えないだろ!?!」

「いや、お前ならできると俺は信じてたー!!」
「もう怪物も怖くねー!! 有栖ーかつとばせー!!」

3球目。バットが真芯を捉える。やや振り遅れ気味のライト線ファールとなった。しかし、ボールは見えていた。捉えていた。150キロの球速も目に慣れ、タイミングも掴んできた。次は確実にスタンドへ叩きこむ期待さえできるといふものだ。

ツーアウト満塁。ワンボール、ツーストライク。

誰が見ても追い込まれていたのは球磨雪那の方だった。

天才が怪物に勝つかもされない。

そう思っていた。葵以外は。

(ねえ、燕ちゃん。あの人に何を言われたの?)

葵はつい先ほどの光景を思い出していた。

ピッチャーがワイルドピッチをしてホームベースまでカバーに入ったところをしっかりと見ていた。そして、マウンドに戻る際に、燕に声をかけていた。ようにも見えた。

(何、言われたの……?)

そこからだ。燕がゾーンに入ったのは。

間違いない。球磨雪那が燕に何かをした。何かを吹き込んだのか? 何にしろ、きつかけを作った。葵は知らず知らずのうちに誰かに自分の心臓を鷲掴みされているかのような、例えばような焦燥感にかられた。

そもそも、球磨雪那を本当に追い詰めているのだろうか。葵にはどうしても燕が追い詰められているようにしか見えなかった。本当は頑張れと声を出したかったが出なかった。

何故か、ここまでの試合の一つ一つを思い返し、燕がエラーして元気がなくなってきたことを思い返す。

らしくなかった。

燕らしくない気の落とし方だった。そもそもエラー自体もらしくない。それは何かに動揺していたから？それは一回の攻撃で初球顔面スレスレの危険球があったから。じゃあ、あの暴投は故意だということに気づかされる。

球磨雪那の良くない噂は葵の耳にも届いていた。有名な話では自分のストレートを捕れるキャッチャーを探すために自分の通う中学の野球部の人たちに怪我を負わせたというものがある。あのストレートならそれも可能だろう。兄が野球をやめて妹は反抗期に入つてあのストレートは人を傷つけるようになったらしい。

だから、今回は彼女の気分で燕を標的にされたのか？それは否だ。気分じゃない。もつと明確な敵意があったからじゃないのか。

球磨雪那は投球モーションに入る前に首筋の汗をぬぐった。怪物でも汗をかくのか。それは不思議ではないだろう。そう見えるだろう。ああ、彼女はとても狡猾だ。汗を拭うように見せてバッターボックスに立つ燕に首切りのジェスチャーをしたのだ。そう見えた。その証拠に燕の顔が強張ったのがわかる。

(そもそも、あの2人は試合始まる前に何を話してたの……?)

試合が始まる前に燕がお手洗いに行くといつて一時的に姿を眩ませた。

少し心配した葵が探しに行った時に、2人は会っていたようだ。親友の自分には何も知らさず、球磨雪那と会っていたのだ。2人の会話は聞けていない。遠くから2人を発見したから。近づこうとした時にはもう話が終えて燕はこちらに引き返してきていた。あの時、葵は羨ましがった。ただ、何を話しをしていたのかと訊ねると話をはぐらかされた。内緒だそうだ。なら、葵は試合が終わったら挨拶しようと思つたぐらいで、燕の抱えている問題なんてこれっぽちも気づいてあげられなかった。

燕は親友にも言えない何かを隠していた。親友に打ち明けられな

かった何かがあるのだ。

たとえば、それは怪物をブチギレさせるような話であったのならば、このシチュエーションも納得できる。

球磨雪那は同学年の中学生相手に敵なしのストレートを投げる怪物だ。いつでも好きな時に三振が取れるのだ。それは言い方を変えれば自分の采配で好きな時に四球を選ぶこともできる。それによって可能なのは、最終回の最高の見せ場に打席に立たせたいバッターを選ぶことも可能ではあろう。

たとえば、天才をギリギリの極限状態まで追い込み、嬉しい誤算でゾーンまで引き出して、もつと最高にヒートアップしたクライマックスを怪物と天才の互角な熱いバトルを見せることができるのなら、球磨雪那の体裁は保たれる。互角の戦いと見せかけて気のゆくまま有栖燕をぶちのめすことができる。それが、怪物の狙いだとしたら……もう、誰もこの試合を止めることはできない。

ここから42球。

少女の孤独の戦いは尚も続いていく。

〇〇九〇 明日は我が身

少女は球磨兄妹に憧れ親友と共に野球を始めた。いつしか夢もできた。親友と交わした約束、それは球磨兄妹と甲子園で熱い試合するというものだ。でも、その夢はもう叶わない。

さて。黄昏町エスペラント VS 七森ブルースの試合が始まる少し前。

「あら、有栖さん久しぶり。七森ブルースの選手なんですよってね？」

「一番ショートだなんて凄いじゃない。今日はよろしくねと言いたい所だけど……あなた、まだ野球してたの？」

「は、はい、おかげさまで……」

球磨雪那くませつなとは約3年ぶりの再会だろうか。小学生の時に一度、病院で雪那の兄、球磨蒼士くまそおしの見舞いへ行つた時以来になる。ありすつばめ有栖燕は少女との久しぶりの対面に少し緊張していた。

「ふーん、おかげさまで？」

燕は苦笑いした。相変わらずというか、自分は雪那に嫌われたままであった。嫌味の一言二言は覚悟していたが、けっこうくるものがあり、相手は頭一個分背が高いから、冷たい目で見下ろされるとへこむ。

「まあ、いいわ。それよりも、ヒトを待ち伏せして何か用かしら？」

「あの……試合が始まる前にどうしても球磨さんに知ってもらいたいことが。その、私が野球をまだしていることは気に入らないとは思いませんけど、それでも伝えたいことがあるんです」

燕の今は球磨兄の犠牲の上にある。

今こうして燕が野球をし続けられているのも、球磨兄が命がけで

守ってくれたから。それは美談のように聞こえるが、命が救われた代わりに犠牲は出た。交通事故で、偶然そこに居合わせた球磨兄が燕を庇って大怪我を負った。

球磨兄は足を負傷し、自分の身内に起きていた不幸とかもあり何もかもすべて嫌になり野球をやめてしまったのである。

球磨兄妹にも夢があったそう。球磨兄妹の名前を天国にまで轟かせるために2人でプロ野球界で暴れようという夢が。しかし、球磨兄はグレて野球と妹を見捨て、二人の夢は潰えてしまった。雪那にとって最悪の話である。燕は憎むべき敵である。

開口一番に、雪那は言ったはずだ。懐かしむように、でも、野球していることを指摘したはずだ。2人の夢を奪ったお前がまだ野球をしているのかと……

だから、自分の気持ちを伝えなければならぬと思った。そう思われていると分かっていたから試合前に会いに来た。

「私が野球をまだ続けているのは球磨くんを命を救ってもらったからです。救ってもらった命だからこそ、私が野球をやめるわけにはいきません」

「じゃないと、兄さんが犠牲になってあなたを助けたことが無駄になるからかしら？」

「は、はいそうです……」

「だから、兄さんに顔向けできるように今日まで本気で野球をやってきました。今日の試合でそれを証明したいってところかしら？」

本当にこの人は苦手だ。

「有栖さんって、おバカさんなのね。そんなことわざわざ伝えにこなくとも、あなたが野球を続けている理由は私なりに理解しているつもりよ。だけど、やっぱり本人の口から直接聞くのは大事なことよね。あなたが兄さんに何も負い目を感じずにテキストに野球をしているような美少女の皮をかぶったクソビッチじゃなくて本当によ

かったわ」

雪那が一步前に踏み出し、燕は一步後ろに下がった。相手に気圧され一步引いて下がってしまった。雪那の左手が燕の右頬を捉えていた。頬を撫でられていた。ゾツとした。背筋に嫌な汗が流れた。もう一步後ろに下がってそれを拒絶するのに、体は金縛りにあったかのように動かなくなっていたのだ。まるで蛇に睨まれている蛙のように……

「少し話が脱線したけども、あなたの想いを十分に受け取ったわ。話してくれてありがとう。それで、それを聞いた上で返答してあげるのだけど……だから、それが何？」

「な、なに……って」

「まさかこれで許されると思ってはなかったのでしょうか？」

「そ、それは……ですけど、これぐらいしか私にできることはなくて。野球を全力でプレイして、貴女に認めてもらうしかなくて……何十年かかってもいい、あの日のことを許してほしいと思ってます……：……：どうか、私の全てを否定しないでほしいです」

「そう。でも、あなたを許すことはこの先永遠にないわ」

「……………」

燕は俯いた。わかっていたはずだ。自分が兄妹2人の夢を壊したのだ。一生かかって彼らに償うことはできないとわかっていたはずだ。だから、野球でプレイして球磨兄に助けられたことは無駄ではなかったと証明したいなんて、妹からしてみればなんで凶々しいにもほどがあるものだ。

「だけど、勇気を振り絞って私に会いに来てくれたんだものね。このまま突っぱねるのも可愛そうだわ」

「……………」

雪那は俯く少女の顎を左手でくいつと持ち上げた。怯え切って見

上げる蛙と、獲物を見下ろし舌なめずりする蛇のように視線と視線を絡める。燕は雪那に睨みつけられ声でなくなっていた。ヒトは恐怖のあまり硬直しすぎると呼吸がうまくできなくなるという。

「なので、こうしましょう」

顎から、また頬へ、そして頬から肩へと滑らかに手が這って、肩を軽く押し一歩引かせて、燕を開放した。燕は呼吸を再起動させ肺いっぱいには酸素を吸い込んだ。そして、むせて咳こんだ。

「野球で自分の価値を証明したいという有栖さんの希望も兼ねて、勝負をしましょう」

咳き込む燕を他所に、これは名案と言わんばかりに無邪気に両手を合わせた雪那は提案する。

「有栖さんが試合で私に勝てたら、野球続けてもいいわよ。私に勝つぐらいなのだから、それは頑張って野球をしてきたっていう証よ。だけど、そのかわり負けた場合は――」

そして、怪物は最大の慈悲と共に微笑んだ。

「負けたら、あなたが野球をやめない限り、あなたの大切なものを順番に奪っていつてあげるわ」

少女は小さい頃の夢を、親友と交わした約束を壊してしまった。親友に相談することなく球磨妹と会い、このことで相談することもできず試合に挑んでしまった。それが少女が親友に打ち明けられなかった罪である。

天文白金野球同好会が観ている試合は異常な野球だった。

一見して、最終回ツーアウト満塁で覚醒した天才バッターが怪物ピッチャーと互角の戦いをしているかのように見えなくもない。球速150キロを超えるストレートを次々とバットに当ててカットしていく。その度にベンチはよっしゃー！と吠え、今日決勝戦を見に来た客席の父兄や一般人は七森ブルース一色に少女を応援していた。中学の試合で2度とこんな白熱した試合はもう見れないだろうと、誰もが少女を応援していた。

例えるなら、コロッセオのような闘技場で猛獣と剣闘士が死闘を繰り広げているようなようだ。

怪物が投げ、天才がカットする。今までカットすらできなかったそのストレートをカットしたのだ。それだけで歓声が沸いた。カットをする度に歓声が沸いた。1球、また1球と怪物が投げ、1球、また1球と天才がカットしていく度に歓声が沸いた。それが2桁を越えると観客はテンションはさらに激しくなり、20球を越えた時なんか、どこかのおっさんが絶叫した。こういうのが名勝負というんじゃない！とな。

しかし、実際には互角に戦っているかのように見えて互角の戦いではなかった。

怪物のストレートをカットしているように見えるが、天才はカットしかできないのだ。言い換えればカットしざるを得ない力量差が怪物と天才の間にある。ライト線のファールも押し込まれている証拠だ。これで本当にこの戦いが互角と言えるのだろうか。怪物のストレートをカットする度に天才は苦痛に顔を歪めているぞ。それに引き換え怪物はストレートをカットされても苦悶の表情1つさえしない。だが、無我夢中に試合を応援する彼らはそれに気づいていない。気づけない程の異常な野球になっていた。

怪物のストレートをカットする度に金属バットから伝わる衝撃は天才の指に伝わり両手、両腕、両肩までに伝わりフォームが崩れ身体を破壊していく。怪物の球威あるストレートをカットしていく度に、

力負けして金属バットは稀に弾き飛ばされた。怪物の渾身のオリジナルストレートをカットしたはいいがカットの処理が甘い時は自打球が燕の身体に鞭を打った。何度も言うが中学生が投げるイカレた速さのストレートだ。オリジナルストレートと豪語するだけスピードは恐ろしく、球速150とはいいが中学生の体感なら160はあるのではなからうか。それに加えてそのイカレた怪物が投げる球だから成しえる鉛球のような球威だ。自打球だろうと女子中学生の身体に当たっていい球ではないことは確かだ。いくら天才だろうとシャレでは済まないだろう。

球磨雪那のオリジナルストレート『スノードロップ』はもはやストライクゾーンだろうが危険球でしかなかった。特徴としてジャイロ回転せず手元で伸びてこない変わりに少し軌道がズレるらしい。ツーシームやカットボールの亜種とでも言えばいいだろうか。カットボールの本来の用途はバットの芯をズラしてカットさせファールボールにしてカウントを取るか、ボテボテゴロ等で打ち取るものだが、このオリジナル種はバットの芯をズラしてバットごと打者を傷つけてしまうのだ。

死球よりもこの危険球を相手のレベルに合わせて投げているとしたら、あたかも互角のような戦いを見せてこの球種を投げてバッターを傷つけるためだとしたら、この試合を早く誰かが止めなければならぬ。だが、誰もこれを見抜けず雪那の狙い通りに試合は続行した。

燕が天才だから、ここまで長期戦になってしまったというのも一つの原因だ。ゾーンまで入ってしまい、生半可では空振りになってゲームセットになることはなくなった。自身が持つ金属バットがへし折れるのが先か、文字通り体がへし折られるのが先か、そういう戦いにもなっていた。気力と根性も必要だろうが……体力を削られ、身を削られ、折れて軋む骨に歯を食いしばり、所々に痣を作りユニフォームの中で流血させても、少女は孤独に戦った。

30球を越えても尚、有栖燕は戦い続けた。

「なあ、ねーちゃん。これはなんだよ。これが野球なのかよ……っ!!」

耐え切れず口を開いたのはメガネくんだった。試合観戦はまだ終わっていないのにも関わらず私語はご法度だ。監督の黒瀬伊織くろせいおりはそろそろ頃合いだと思っただけだが、まさか自分の愚弟が開口一番だったとはため息をつくしかなかった。

「ええ、そうね。これも野球よ」

「俺たちにこんなもん見せてんなよ！ どう見てもただのリンチだろ！ なんて誰も止めにはいかないんだよ！ トラウマもんだろ！」

「あっそう」

「あっそうって……なんだよ、それ。返答それだけかよ……ねーちゃんが俺たちに何でこれ見せてるのかわかんないんだよ……馬鹿な俺にでもわかるように説明しておくれよ」

「アンタ、次 馴れ馴れしくねーちゃんって学校で呼んだら対・球磨雪那バツティングマシンの実験台になってもらうから」

「そんな恐ろしいマシンの実験台にされてたまるかよ!? つーかなんでそんなもんが学校にあるんだよ、ねーちゃん!?!」

「人の話し聞いてた?」

メガネくんは裏・野球同好会で開発されていると云われる対・球磨雪那バツティングマシンの餌食になることは確定した。

まあ、こんな不穏なワードを聞いてしまったのは試合観戦に集中できず辺りは騒然とざわざわしだすだろうと思っただけ。不安と不満の声で教室がざわつきだした。

全てはメガネくんのせいである。

本来なら試合観戦が終ってから話すつもりだったが、まー丁度いい頃合いかと伊織はチュッパチャプスの棒を左右に揺らして考えた。考えて吟味して、テーブルをバンと一叩き生徒たちを黙らし注目させた。

「どこぞのメガネのせいで試合に集中できなてないようだけど、あと

少しだけだから試合を観ながら黙ってアタシの話を聞きなさい」

これは命令であって、それが嫌ならどうぞご自由に出て行けというていの脅しだ。そして、彼らは再び黙りこみ、監督の声に耳を傾けた。「今日、この試合をアンタ達に見せたのはこういう野球をしてる子もいることを知ってほしかったからよ。プレイスタイルは人それぞれと言うけども、あの子はいろいろと拗らせてしまってるね。」

ほら、残酷でしょ？ボロボロのバッターをまだ弄んでいるわ。私に逆らう者は皆殺し的な？それはアンタ達も例外じゃないの。ここで野球をしたいなら明日は我が身と思いなさい。理由なら、そうね。それをアタシが望んだからよ……」

試合を観れば35球目。そろそろだろうか、少数がざわつき始めた。初めは何かの冗談だと思った。少女の額から血を流し、全身打撲や傷だらけになっていた。ちよつと前までそれを自分達はカツコいい！ナイスガッツ！などといって応援していたベンチや観客がざわめきだした。

監督や主審が止めようとしても天才は「ちよつと切れただけです、問題ありません。勝負に集中させてください」と言いつつ続行した。

天才は誰にも助けを求めていなかった。

「アンタ達が野球同好会に入部したい動機があるように、アタシにも譲れないものがあるの。だから、あの子とアンタ達を対決させるつもりだし、それは野球していく上で大会に出場していくと避けられないことではあるのだけど、あの恐ろしいストレートをフルスイングしろと命令も出すわ。」

だから、もし、それが嫌なら、アタシのやり方が気に入らないなら、この同好会に入らない方がいいわ。もちろん、アタシは責めやしないから安心して辞退しなさい。そして、慎重に考えなさい。一応、ちゃんと脅しておくのだけど、怪物の流れ弾に当たっても命の保証はしな

いわ。そのことも考慮し一晩考えた上でちゃんと結論を出して、明日、もう一度野球同好会へ入部するか決めてちょうだい。

もし、入部する気があるなら明日の放課後、野球同好会専用のグラウンドに集合よ。場所は今から配るプリントに書かれてるから。

アタシからは以上よ」

そうやって、伊織はカエル顔のマシロ先輩に指示を出し生徒全員に明日以降のスケジュールが掛かれたプリントを配布していった。野球同好会専用のグラウンドの場所が地図で書かれていた。

「あ、メガネ、アンタだけは例外で強制参加だから。よろしく」

「そんなバカな!?!」

真っ先に同好会やめてやろうと考えていたメガネくんはあっさり掴まった。

「あ、あの、もう一つ、ボクに質問の許可をいただけますでしょうか?」

「何かしらイケメソ君? 次は意味のある質問だといいわね」

「す、すみません……その、このバッターの子は、試合が終わったあとはどうなったのでしょうか?」

42球目が怪物の手から放たれた。

最後の一球である。

少女は証明しないといけなかった。絶対に。兄妹の夢を壊したとしても、親友と交わした約束を守れなくても。自分が野球を続けていくためにもバットを振るう。

願わくば——球磨兄妹、自分、親友と、昔描いていた夢でなくても、いつか一緒に野球ができる日がくると信じて。

しかし……

「ゾーンが切れて横転した時に運悪くバットにぶつけて頭部を強打。

脳震盪を起こし倒れ病院へ緊急搬送されたわ。幸い命に別状はなかったのだけど、それまでの自打球で酷い状態みたいで長期入院を余儀なくされたわ。今はだいぶ回復して自宅治療の身だけどね、トラウマたっぷり植え付けられたみたいで……野球をやめて引きこもりライフを送ってるわよ」

ストライク、バッターアウト。
ゲームセットだ。

○100 悩め、青春!!

天文白金野球同好会の初めてのミーティングはこれにてお開きである。

「あーなんだかむしゃくしゃしてきた！ カエルの血が滾るというか、ちよつくらここであのヤンキーくん一発シメなておかないとボクの気がおさまらないのだぜ!!」

「オー、ソウシ探しに行くのデスカー！ なんだか面白そうなのでワタシもお供しマース!!」

そういつて、一番に理科室から退出マシロ先輩とソニアたんであった。仲いいな、あの二人。しかし、この時間帯、帰宅部のヤンキーくんは果たして学校に居残っているだろうか。

他の生徒たちもそれぞれ解散していく。あの試合を観て、入部をどうするか相談し合ったり愚痴だけを言うだけ言いあつたりしながら退出していく。中には、私には無理だとすすり泣きしてしまう者がいったり、それを爽やかイケメン先輩が慰めていたり、いろいろだ。

そんな中、あの三人組はまだ席を立っていないかった。三船達もあの試合を観て、これから3人でどうするか相談するのだろうか。

「あの女だ……」

「三船氏？」

みふねこたろう
三船小太郎の声は震えていた。この世の終わりだと言わんばかりにテンションが低い。

「あの女だよ、うちの中学の頃にいた恐ろしい女って話したべ……」

「ああ、お前が野球やめた理由になった女子か……」

「忘れもしないべ。いや、思い出したくなかった……」

三船にとつての黒歴史。

たとえば、兄妹喧嘩で代わりになるキャッチャーを探していると後輩美少女に涙ながらに相談された童貞はどうなるだろうか。じゃあ、俺がキャッチャーするべ！と志願して、いぎ少女のストレートを受けみてみてみようかと構えたら剛速球が飛んできて痛い思いしたり。そして、使えないからポイされたとか……。

「まさか、同じ県内に……てつきり関西の強い高校にでも行くかと勝手に淡い期待をしていたのだが、いや、あの女の実力を考えれば常勝無敗の王者・琉惺学院は妥当だった。くそっ、あまりに軽率だった。あれを倒して甲子園行くだって？ 冗談じゃないべ」

「でも、俺たち丸坊主までもうしてるんだよなー。退路を断たれたって感じだわ」

「魔王を倒せばソニアさんに良い歌プレゼントできるかもしれないだよね……」

「ぐぬぬぬ、ソニアさん。俺たちはどうしたらいいんだ……っ!!」

悩め、青春!!

○

空がすこし薄暗くなり始めたころ。

葵は千草を連れて学校の屋上へ足を運んでいた。夜になるその瞬間を待つかのように、沈みゆく夕日を見つめていた。いや、睨んでいたというべきか。

「葵、ちゃん……」

いつもと違う雰囲気。千草は感じ取った。でも、仕方がない。あの試合を観れば誰もがショックだ。それが当事者であり親友が酷い目にあつたのだから、葵の心境は当事者じゃない自分には推し量れるは

ずもなく、不用意に慰めの言葉などをかけることはできなかった。

「チーちゃん、ごめんね。あんな試合見せてしまつて」

「ううん。その、怖かったけど、葵ちゃん達のことを知れてよかったと思つてる」

葵の活躍している姿を見れて本当によかつたと思つている。葵の親友がどんな人なのか確認できてよかつたと思つている。そして、葵が何故野球部のないこの学園に来たのかも少し理解できた気がした。

「あの試合を観るたびにね、悔しい気持ちになるんだ……」

「……………うん」

夕焼けに染まり憂いの少女の頬を撫でるかのように、心地よい風が通り抜けていく。

「私ね、あの日、試合が終つてからあの人を追いかけて問い詰めたの。試合前に燕ちゃんと何を話してたの？つて」

「試合前に……………2人は会つていたの??」

「うん。試合前に中々戻つてこない燕ちゃんを心配して探してみると、偶然2人が一緒にいて何か話していたんだ。でも、遠くの方からしか確認できてないから会話は聞いてないんだけどね。燕ちゃんに訊いても教えてくれなくて……………絶対に何かあると思つたの。だから、問い詰めたんだ」

「そ、それで、球磨さんは……………なんて言つていたの?」

「燕ちゃんは自分が野球していることを許してもらうために会いに行つてみたい」

「許しに……………??」

「うん……………私も初めて知つただけだね。燕ちゃん、過去に交通事故に遭つていたみたいで、その時、助けてもらったのが球磨くんだったんだつて」

「球磨くん、が……」

「3年前、球磨くんが交通事故に遭って足を負傷して野球をやめたことは噂で知っていたけど、まさかそこに燕ちゃんが関係していただなんてね……あの人に、言われたの。親友なのに、そんなことも知らなかったの？つて……」

「そう、なんだ……」

「怖かったんだと思う……。私たち、小さい頃に約束してたんだよ。野球上手になったら球磨兄妹と対戦しようつて。甲子園目指して戦おうつて。でも、燕ちゃんは私たちの夢を自分の手で壊してしまったと思うんだと思う。だから私に相談することはできなかつたんだと思う。それから、あの人の言い分としては、球磨くんが野球をやめた元凶が野球やつているのが気に入らないらしい。兄妹の夢まで壊しといて野球続けられていられたわね、つて……それを燕ちゃんはずっと抱え込んでいたんだと思うんだ」

「3年間も、独りで……」

数字で見れば短いようだが、中学生生活を3年間引きこもり気味だった千草なら、わからなくもない過去を経験していると思われる。誰に何も言えず、辛い思いをしてきたんだと理解することはできた。

「私は燕ちゃんの親友なのかな……つて、今でも自信を無くすよ。いつも隣にいたのに、バカみたいに野球のことばかりで燕ちゃんの気持ちにも気づいてあげれなくて……何も助けてあげられなくて、それが本当に悔しいよ」

「でも、葵ちゃんが燕ちゃんの隣にいたから、燕ちゃんも3年間頑張つてこられたんじゃないかと私は思うよ」

「そう、なのかな……」

「きつとそうだよ！ 中学に友達のいなかっただこの私が言うんだから間違いないよ!!」

「チ、チーちゃん、たまに凄いこと言うね……でも、ありがとう。そう言ってもらえて嬉しいよ」

「どういたしまして……!」

ふんす、と千草は深く鼻息を荒く息を吐いた。

「それで、球磨さんは燕ちゃんが謝ったけど、許さなかったんだよね……あの試合を観る限りそう思うしかないよね……」

「うん。一生許すことはないって。野球をやめてほしいって。でも、そうしても燕ちゃんは自分が野球をする価値を試合のプレイで証明たかったんだって……だから賭けをすることになったらしいんだ」

「賭け。野球勝負ってこと……?」

「燕ちゃんが勝てば野球を続けることを認める。でも、負ければ野球をやめない限り燕ちゃんの大切なものを奪っていく。そういう勝負になったらしいね」

「そんな、ひどい……」

たぶん、葵が雪那の投げる意図を読み三振を狙いにいっていたら、雪那は葵はデッドボールにしても出塁させていただろう。

何が何でも燕を打席に引きずり出させていたはずだ。

「最終回の燕ちゃんの打席、初球からワイルドピッチになったでしょ?」

「う、うん……暴投のことだよね??」

「そう。あの時、ピッチャーのあの人はホームベースまでカバーに入っていたんだ。そこで、燕ちゃんに何か声をかけたのは私、一塁ベースから見てたんだ」

「そ、それも何か聞いたの?」

「もちろん。その一言で燕ちゃんはゾーンに入った。トリガーとして十分だった。あの人は燕ちゃんに負けたら次は赤毛の子ねって言うたらしいよ……」

「赤毛の子って……」

「うん。燕ちゃんが野球をやめない限り、次は私がターゲットになる

から。だから、燕ちゃんは最後まで独りで戦って野球をやめたの……」

泣きそうになったのは千草の方だ。野球というのはこれほどまでに人を傷つけるスポーツだっただろうか。辛い思いをするスポーツだったのだろうか。千草が知っている野球は違う。だからこそ、千草は葵を抱きしめた。そうじゃないと、自分が耐え切れないから。

「二通り話を聞いて、私、流石にあたまにキてあの人を思いつきりブってやったんだ」

「そ、そうなんだ……」

「国宝級の頬つぺたをビターンとね……あー、もう、あれで完全に目を付けられたよねー。あははー……でも、それでもいいと思った。燕ちゃんには悪いことしちゃったけど」

「でも、そっか……それなら燕ちゃんが野球続けても一人で負い目を感ずることないんじゃない……」

「うん。私もそれが狙いで、私がこの手であの人の攻撃対象になった。あの人への宣戦布告は当に完了済みだよー……だから、燕ちゃんは野球を続けてもいいと思うんだけどね」

「言つて、駄目だったの？」

「うん。もう野球やりませんって駄々こねて病室から脱走しようとしてたりで困ったもんだよ……」

「あ、はは……げ、元気はいいんだね……」

3階から脱走しようとした際に足をやらかしさらに2か月プラスの入院生活を余儀なくされたのだが。皆まで言うまい。

「あのね、前からずっと葵ちゃんに聞きたかったことがあるの……球磨くんがこの学園に入学することを知っていたから、葵ちゃんは球磨くんの後を追っかけて入学してきたんだよね？」

「うん。我ながらストーリーカー行為も凄いやと思ってるよ。推薦とかの

話も少しあったんだけど、それも蹴って来たんだよね。まあ、後悔はしていないよ」

「その……燕ちゃんの、仇を取るために??」

「もちろん」

「やっぱり……そうなんだね」

「理不尽にも、球磨くんが足怪我しても野球続けていれば、こんなことにならなかったのにつて……今でもたまたまに思うことがあるよ」

「……うん」

「実際、もう足の怪我治って野球できてたし」

「え、そうなの……!?!」

「そうなのつて、チーちゃん入学式の日見てなかったの？ 球磨くん、打席立ってスイングしてたじゃん。おしくもファールボールだったけど、ちゃんとホームラン級の球を打てたよ」

「あ……言われてみれば、た、確かにそうだよね……」

「ボスから聞いた話だと、球磨くん、こっそりりハビリは頑張っているらしいんだ。誰がどう見ても野球をやりたくてうじうじうじうじしているのよつて言つてたんだ……見た目ヤンキーなのに、笑つちやうよね」

「あ、はは……葵ちゃん」

そうだ、球磨蒼士はバットを振れる程に回復している。どれほどリハビリを頑張っていたのか、何のためにリハビリをしていたのか考えれば一目瞭然だった。本人がそれを否定しようと周りは確信していたのだ。

「球磨くんつて、たまにかわいいところあるよね」

「う、うん」

からかったら、ぶっきらぼうになるところとか。

「球磨くんつて、カッコいいよね」

「うん」

シスコンらしいけど。うじ虫くんだけど。

「私達って、球磨くんのこと全然知らないよね」

「……うん」

好きな食べ物も何も知らない……

「ねえ、チーちゃん。やっぱり球磨くんと野球したいね」

「うん……っ!!」

彼と野球がしたい。この気持ちに嘘はなかった。

「私もマシロ先輩と同じで、確かに復讐なのかもしれない。燕ちゃんの仇を取るために球磨くんを利用しようと思ったのは事実だよ。今もそれは否定しない。でもね、私は球磨くんと野球がしたい。あの球磨兄妹の兄の方と同じチームで甲子園目指すなんて人生で一度きりだよ。この先、来世に渡ってもできないことだよ」

「そうだね」

「だから、球磨くんを何が何でも野球をさせる。うじうじ言っているうじ虫くんをグラウンドに引きずってでも野球をさせるんだ」

「うん」

「それでね、球磨くんを野球同好会に入れて、燕ちゃんに報告をしよ。球磨くんが野球を再開したら燕ちゃんも野球を再開してくれるはずだよ。だからチーちゃん、球磨くんを連れて一緒に燕ちゃんに会いに行こうよ」

「うん、うん……っ!!」

「そして、目指せ、甲子園!! 打倒・球磨雪那さん!! あの人に野球の楽しさをもう一度、私達で教えてあげよう!! だから、私に力を貸してチーちゃん!!」

「勿論だよ葵ちゃん!!」

葵の方針は決まった。ちよつと忘れかけていた大切なことを思い出すために。リトル時代に見た球磨兄妹のように野球を楽しもう。だから、

「チーちゃん、もう一軒付き合ってくれない?」

「いいけど、それだと居酒屋に行くOLみたいだよ……葵ちゃん」

「私達つてもう飲み仲間じゃくん」

「お酒は20歳になってからだよ……っ!」

「よし、この勢いで球磨くんのお宅に突撃だー!! 宣戦布告しに行くよー!!」

「いきなり宣戦布告ー!! 駄目だこの酔っ払い……ねー葵ちゃん!! ストーカー行為も相手の家までいったら犯罪だよ……あくん待って……っ!」

犯罪の二オイもしなくもないが、これも青春っ!!

〇11〇 宣戦布告

天文白金野球同好会の初ミーティングが終わり、すっかり日が落ち始めた頃。

球磨蒼士くまそうしは七々扇泉ななおうぎいずみというギャルに呼び出されマツクにやってきていた。夕飯前だが小腹が空いていたこともあり、フィレオフィッシュを注文する。育ち盛りの男子高校生にとって、これぐらいおやつ感覚だろう。

「ねーあれ、天文白金の制服じゃない?」

「元女子高の? 2人ともレベルたっか……」

「元女子高だけにあんなイケメンがいたら倍率も高いはず。しかし、彼女は特上をゲットした……つまり彼女は一体何者なのよ!」

「キー、悔しいわ……っ!! ブサ面彼氏と交換してくれないかなー??」

などと、他の客から注目されるワケだけでも。いつものことだった。七々扇の気分は上々。

「ねえ、球磨。あーしら、カップルだと思われてるみたいだし」

「あつそ」

「テレてんの?」

「テレてねーっての」

こうやって仏頂面の彼をからかうのも七々扇の楽しみの一つである。

2人は付き合っていない。2人はクラスメイトなだけであり、友達以上恋人未満といえれば怪しい。ただ時たまマツクに来て少しお喋りをして過ごすだけの旧知の仲。中学の頃、一度だけ球磨の家にお邪魔したことがあり、既成事実を謀ろうと強硬手段に出てみても運悪く妹の大魔王が居合わせて失敗に終わったぐらいしか、2人の間に色恋沙汰はなかった。

ただ、小学校からの付き合いであり、腐れ縁に近く今は同じ1年F組なんだから、たまにはマツク行こうぜーと七々扇から誘いで、球磨の気分が乗れば成立する。

これが他の女子からのマツクの誘いだと球磨は断るのだから、七々扇としては鼻が非常に高い限りである。

「それはそうと、球磨。貸しーつね」

「あ？ 何の??」

七々扇はフライドポテトにケチャップをどっぶりつけて、つけるだけじゃ飽き足らず、かき混ぜては「にひひっ」と笑う。

「アンタの代わりに野球同好会のミーティング行ってきたよ」

「誰も頼んでないんだがな」

「それでも貸しは貸しだし」

「じゃあ、そのポテト代でチャラだな」

「いやいや、ポテト代で今日の分は清算できないし。思ってたより激ヤバな内容だったし」

「ふーん」

球磨は興味なさそうにフィレオフィッシュを完食して包み紙をくしゃくしゃに丸めた。

七々扇には、球磨がとても気になっているようにしか見えなかった。といっても、詳細を語るほど優しくはない。七々扇自身も、あのミーティングで思うところがあった。

「あーしは球磨のしたいようにしたらいいと思うし……球磨の意思を尊重する」

「……………」ズズズウー

「まーでも、野球しないのならそれもありっしょ。あーし的にマツクで驕って貰えるし役得?って感じ」

「……………」ズズズウー

球磨はドリンクを底まで飲んで返事を濁した。カップに残ったの水をストローでかき回して溶かして水になったところをまた吸い上げる。とりあえず、七々扇に睨みつけるをしたが効果はないようだ。

「でも、やっぱりマツク行くななら昔みたいに雪那も誘って3人で行きたいし……………」

「……………」ズズズウー

球磨は思った。もう昔に還ることはできないんだ……………」と。

そして、スマホが一回震えた。三女。光葉からラインがきた。

『蒼くん、お腹空いた。今どこ？ 早く帰ってきてご飯一緒に食べよ』

「あーしとのデート中にスマホ見るなし」

「え……………」

「え、じゃないし。これがデート？みたいなワザとらしい顔もするなし。ちょームカつくんですけど……………」とりあえず、あーしにも見せてみ」

「……………」ズズズウー

「あーあー見たくないもの見せつけてんじゃねーぞこのシスコン！」

「……………」

七々扇も球磨の光葉からの内容を確認してキレた。このあと、不毛なやり取りが行われるが少々お付き合い合ってください。

「ちなみに聞くけど、あーしと光葉さんだったらどっちを彼女にしたい？…」

「なんだ、その2択。ミツバ姉は いとこ だろ」

「じゃあさー、いとこ じゃない設定だったら？」

「ミツバ姉の方がいいな」

「即答っ!？」

やはりこのシスコンは駄目だ。この男、優しくされた姉しか女を知らないシスコンだ。いや、女を知らないという表現は語弊でしかないのだが、七々扇は十分にそれだけで戦慄を覚えた。この事実を光葉に伝えてあげたら本人は喜ぶのだろうか、あくまで2択でしか回答できなかったわけだから、これ以上何も言うまい。

またの機会があれば『球磨は一体誰が好きでしょうか選手権』でも開催するであろう。

『今から帰る』

とりあえず、球磨は光葉にそう伝えて、ドン引きしている七々扇を家まで送り帰宅した。帰宅というか実家に帰ったというべきか。ご飯を食べに一時帰宅的な。

『東雲』の表札。プロ野球選手を2人も排出した東雲家はちよつとした豪邸だったりする。そもそも小さい頃から、ここに住んでいた。長女と次女がプロ野球選手になってから建てた豪邸というわけでもなく、叔母たちの財力で豪華な家に住んでいたのだから……甥と姪の面倒も見れるのだから、さすがの球磨も舌を巻くしかない。

今、この豪華な家で暮らしているのは叔母と三女の光葉だけである。叔父は海外赴任だそうな。

両親がいなくなってから全員一緒に暮らしていたのにな……としんみりしてしまうのだが、大人になるということはこういうことなのだろうと受け入れるしかない。いずれ、子供は親元から離れ巣立ちするのだ。それが遅かれ早かれただけだ……ガレージ横の扉を開き、コンクリートの階段を上がり、無駄に伸びる玄関前ポーチを歩いて、ようやく玄関に辿りついた。

「……………」

玄関横に置かれた、叔父が海外から送ってきたよくわからない置物がとても強烈だ。球磨はこれが女性のお尻にしか見えないので早く処分したいところだが、叔母がえらく気に入って捨てられないのだ。叔母はこれを海外版の設楽焼と絶賛しているのだから、捨てられない。

まあ、そんなことよりもだ。

玄関を開けて中に入れば、いつもの我が家に帰った気分になるのだが……靴が、いつもより多いことに気が付いた。

2人分……

叔母とお客さんの分かともおもったが違う気がする。

一瞬、次女が帰ってきてくれたのかなと淡い希望を持ったもの。しかし、長女も次女も遠征中のため、それはまずない。じゃあ、この靴は誰のだろうと思うのだが、どこぞの女子高生の革靴だと何となく予想できる。可能性があるとしたら、光葉の友達が来ているのだろうか。でも、それならお客さん来てるということラインで知らせてくれているはずだ。

それで球磨の頭の中に過ったもう一つ、最悪な予測を試してみた。寮生活をしているはずの妹の雪那が一時帰宅しているという予想だ。現在もなお兄妹喧嘩は継続しており3年間も続いている。

だから、高校生になってからは妹は琉惺学院の近場に最近建てた寮で暮らしているし、球磨もここ実家ではなく、長女がチームの寮からマンションに引っ越したので、強制的にそこに住むよう叔母から命令された。妹と顔を合わせる機会が減ったので万々歳なのだが、結局お盆や正月には顔を合わせることになるだろう。今の球磨はそれを頭の片隅に置いて、そこでプチ1人暮らしを満喫している。

まあ、いつも家に1人な光葉の願いもあつて、毎日とはいかないがほぼ毎日ご飯を食べにここに一時帰ってくるわけだけでも……とりあえず、ここで長考していても仕方がない。とりあえず、中に入つて様子を伺い雪那がいたら即刻退散しようと心に誓い……靴を脱いだところで光葉が出迎えてくれた。

「蒼くん、おかえり」

「おう」

いつもの当たり前のやり取り。光葉は表情豊かな方ではない方なのだが、今この時だけは微かに嬉しそうに見える。で、対してこの世話のかかる弟もどきはそっぽを向いているがな。

「客、来てるのか？」

「あ、うん……」

どこか、気まずそうに返事をする光葉。

光葉はおろした髪を束ねてぐるぐるとヘアバンドで起用に括りつけて頭の上にうんこ型のヘアスタイルを披露してくれた。とても器用なことだが、何故うんこ型なのか…球磨は理解に苦しんだ。

光葉はよくヘアスタイルを変える。モデルの仕事もあるからだろうが、いろいろ大変なのであるとは察しつくけど、いつも感想を求められる球磨としては正直今回も困ってしまった。

「ど、どうした、いきなり……それって、うん……ソフトクリーム？」

スルーしたいが、一応、聞いてみた。

「うん。私、ちよつとは反省していますって意味を込めたソフトクリーム型ヘア」

「そ、そっか……」

この人、たまに天然だ。そしてこの人も七々扇と同じ金髪だ。金髪なので、どうしてもう〇こ型にしか見えない球磨であるが黙っておこう。

三女・光葉は新しいヘアスタイルを獲得した。とにかく、反省して

いますアピールをする時に使えるのだとか……。

そして、

「蒼くんにお客さん」

「は？ オレ？」

てつきり、妹が帰ってきたのかと思った。妹が帰ってくるのを知っていたながら、そのことを知らせてくれなかったから反省してますアピールをしたのかなとも思った。でも、違った。脱出ルートの確保など想定した脳内シミュレーションは無駄になったようだ。杞憂に終わる。

しかし、それとは別の、最悪な展開だと球磨も流石に予測できなかった。反省はしているけどもごめんなさいとは言わない三女に手を引かれリビングに移動した。

球磨は今も思う。何故家に入れたし……

「あ、球磨くんおかえり！ 待っていたよ!!」

「ご、ごめんね、球磨くん。流石に私は止めたのだけど……」

「違う。2人は何も悪くないよ。外で待たすのも可哀想だから、私が入っていいと許可した」

ス、ストーカーはついここまでやってきた。というか、隣で三女がピースサインしている。反省の色はまったく見えなかった。

まったく悪びれることのない赤坂葵と、家に押しかけた後ろめたさで気まずそうにしている姫路千草のこの違いってなんだろうか……

「球磨くん、宣戦布告にきたよ！ 明日、放課後に野球しよ！」

「よし。わかった、とりあえず警察に通報するか……」

「ふあっ!?!」

ポケットからスマホを取り出し110の番号を押そうとした。しかし、光葉の説得もあり通報することはなかった。ただし、用件の終

えた2人を早々に家の敷地内から追い出す球磨であった。塩も一応撒いておいた。

もうウンザリだ。どこまで自由なんだあの女は……ここは雪那も帰ってくる家でもあるのだ。タイミング悪く鉢合わせたらどうなっていたことやら。そういう予測も考慮できないほど馬鹿なのだろうか。執念深いがゆえにあの笑顔がとても恐ろしい。

だから、球磨は葵の宣戦布告を受けて立つ。

明日、決着をつけて全て終わらせよう。

○12○ ワンストライクからだったよな？

午後9時過ぎ。

夕食を終えた少女は日課のランニングでいつもの神社まで走った。野球同好会の入部希望者勧誘とかでごたごたしているが、これだけはサボるつもりはない。毎日、体を慣らし調整していく。長距離を走っても息切れしない呼吸法で息を吸って吐く。走りながらどこの筋肉を使っているか意識して走る。ただ、走るだけではいけない。一番大切なのは何を目標にして走るかが大事だ。

——
葵は野球をやめた人の気持ちが変わらないんですよ。

親友に言われた言葉がまだ心に残っている。とても悔しかった。その通りなのだから。少女は野球をやめた人の気持ちをわかっている。わからない。どんなに辛い思いだったのか想像はできるが、やはり彼らの気持ちをわかることはできない。その気持ちは野球をやめた者にしかわからないのだから。

それでも、少女は親友に話してほしかったのだ。少女は親友に相談してほしかったのだ。少女は親友と乗り越えていきたかったのだ。

私達の夢を……私がここで終わらせるわけにはいかないっ——

それを執念というのだろう。絶対に諦めない心。ここで少女が立ち止まれば本当に終わってしまうのだろう。戻れなくなる。残るのは後悔だけ……

だから、少女は走り続けた。立ち止まるな。転んでもまた起き上がれ。

走り続けばいつかきつとたどり着けるのだ。それが目指していた道から逸れたものであっても、自分の信念を貫き通せばたどり着け

る。自分の気持ちも彼らに届くはずだ。

「葵、5分遅刻よ」

「あ、しゅみましえん……」

夜の神社で特訓は青春野球ものには最高の場所だ。いつものように黒瀬伊織（監督）は少女にグローブを渡した。自分はキャッチャーミットを付けた。明かりはあるも暗がりで見えづらい中、ピッチング練習を開始する。

「内角高めのレストラン。ボール1個分外」

「おっす！」

ピッチャーが投げるコースはキャッチャーが指示して、ピッチャーはキャッチャーの要求通りの場所へ寸分の狂いもなく投げる投球練習。

「内角低めに入るシンカー。ボール1個半分外」

「おっす……っ!!」

「外角低めのスライダー。ボール3個外」

「おっす……っ!!」

「高め3個分外の釣り玉」

「おっす……っ!!」

「今、2個半分だったわよ」

「しゅ、しゅみましえん!!」

「ツーボール、ツーストライク。次、打ってくるわよ。外角いっぱいのレストラン。クロスファイヤーで対応して」

「お、おっす……っ!!」

「……………」

スパイクでもないし、全力投球もできない。ただ、今のピッチング

の球のキレは非常に良かったのだが……。

「これじゃ駄目ね。場外よ」

「うへ〜」

怪物相手のシミュレーションをした結果、ヤンキーに柵越え場外ホームランを打たれたらしい。

「明日、決着つけるんでしょ?」

「はい!ボス!!」

「だったら、もう一度初めからやり直し。内角高めのストレート。ボール1個分外」

「おつす!!」

大丈夫。きつとこの想いは本物だから彼にも届くはず。

○

そして、翌日の放課後。

天文白金野球同好会の真の入部メンバーが揃う。学校から少し離れた所にある野球専用のグラウンド。木々に囲まれた敷地はそこそこ広く、おおよそだが球場二個分がすっぽりハマる大きさがあるらしい。どこかの誰かさんが私情で購入した土地だとかで、ちよつとした緑地公園みたいなものだ。ちよつとした遊歩道もある。しかし、センターの奥の奥は雑草が生い茂っていて、建材が所々積み重ねられて整備は行き届いていないみたいだ。フェンスもない。とにかく、雑。手抜き感満載の即席のベンチが目立つ。一応雨風しのげる屋根付きではあるがな。道具倉庫は簡易的なものが置いてあった。

彼らは「おおう!!」と声を上げてチャリコンをテキストに止めた。コンテナハウスなるものが設置されていて、あれが我ら部室だそう。男女別々に2つ設置されているという配慮。とりあえず、テキ

トーに置きました感が拭えない部室ではあるが、葵の指示の下、部室でジャージ姿に着替えて準備完了だ。

「整列ー！ー！！」

黒瀬監督の号令と共にグラウンドに整列する。

天文白金のイメージカラーの白を基調としたジャージを身に付けた男女混合の野球同好会メンバーは整列した。昨日のミーティングでは20人いた生徒も今はぎつと数えると半分近かった。葵だけは自前のユニフォームを装着している。入学式でも着ていたやつだ。やる気満々である。

「さて、改めまして天文白金野球同好会へようこそ。歓迎するわ、よろしくね」

「！！」よろしくお願いしまーす！！！！！！

「じゃ、とりあえず、1人ずつ簡単に自己紹介していつてちょうだい」

順に自己紹介していった。先頭にいた葵からである。

「1年A組、赤坂葵あかさかあおいです。ポジションはピッチャー。エースの座は譲る気ありません。よろしくお願いまーす」

「お、同じく1年A組、姫路千草ひめじちぐさです。ポジションは……じゃなく、マ、マネージャー志望です。皆さんのサポートを頑張るので、よろしくお願います」

「1年F組の黒瀬竜紀くろせたつきです。ポジションって……ねーちゃん、俺のポジションってどこだよ？」

「アンタねえ……まあ、いいわ。アンタは2番でセカンドよ」

「セカンドかー。しかも。打順2番って俺があのだストロイナストレートを手をバンドしろってか!？」

はい、次。

「あーはいはい、メガネくんはスルーしてと…えー、3年のマシロ先輩だよ。1番ショート希望なんでよろしくー」

「マシロ、アンタその恰好で野球するつもり？」

マシロ先輩はカエルの被り物を装着していた。というか、この人、生徒会どうするんだろう…という千草の疑問は拭えなかった。

「勿論ですぜー、ボス。まだ、コレを外す時じゃない」

「わかったわ…じゃ、次ね。ソニア」

「ハイハイ。マイ ネーム イズ、ソニアIIネイサン。セツナ・クマと勝負するためにジャパンにやってきましたー。よろしくデース!!
あ、ポジションは内野、外野、どこでも守れマース!!」

よくできました。はい、次。

「2年の三船小太郎みつねこたろうです。私立の中学で軟式を1年ぐらいしてました。外野ならいけます。よろしくべ」

「同じく2年の馬淵学まぶちがくです。野球はゲームでの知識しかありませんが、ルールは大丈夫だと思います。よろしくお願いします」

「2人と同じく2年の鹿苑隆史ろくえんたかしです。去年は三船氏と馬淵氏とでバンド組んでました。初心者ですが、とある人に歌を作るために野球を通していろいろ——」

長くなりそうなので、割愛。次、ラスト。

「3年の織部おりべ（おりべ）というものよん。野球はド素人だけど、マシロちゃんにお願いされたから助っ人として頑張るわん。ちよつとの間だけど、よろしくねん。うふん！」

「」「」「……」「」

とりあえず、これで全員だ。合計9名。うち、選手8名、マネージャー1名……うん。約1名、巨漢なスキンヘッドのニューカマーがいるが、気にしないでおこう。皆がああミーティングを見て覚悟をもって集まったメンバーであることには変わらない。

「20人中9人と約半数、想定以上に集まったから一安心よ。これで大会も出れるわね」

「確か、最低人数9名なら大会に出場できるんだでしたっけ？ ボス」

「そうね。1人でも欠場したら試合できなくなるの。だから、ここにいる一人ひとりが怪我しないようにすること。もちろん、ハードな練習もするけども、無茶はさせないつもりよ。だから、アンタたちも常に心掛けて入念なストレッチは欠かさないようにね」

「「はいっ!!」」

さてと。

「というか、今ナチュラルにスルーしようとしてたけど、1つ確認していいか？ ねーちゃん」

「何よメガネ」

「ぐっ……いや、姫路さんを除いて俺たちは8人。それでねーちゃんにはメンバー揃ったって言ったということは、残り1人はやっぱりあいつなんだろ?」

「蒼土のこと?」

「俺はメガネであいつは何で名前と呼ぶんだ……いや、そうじゃなくて、そう。そのヤンキーのことだよ! まだ、決着はついてないんだろ、赤坂さん??」

「うん、そだねー」

「それなのに、メンバーの人数に数えるのはどうなのかって話だよ。本当にあいつ、仲間になるのか? 赤坂さんはアイツに勝てるのか?」

あいつが野球したくないって言うてんのに、それでも無理やりさせるのか?」

「なに、アンタ、蒼士のこと心配してくれてるんだ？」

「それは断じて違うからな……っ!？」

と、メガネくんの顔が赤くなった。

「メガネくんってツンデレ？」

「だから、違うって!!」

「安心しなよ、メガネくん。球磨くんはもつとツンデレだから」

「いや、何に安心したらいいかわからないんだけど……」

「大丈夫、球磨くんの攻略ルートは完璧だから。だから、キミはキミの役割を果たしなさい。ねっ?」

「いや、だから意味がわからないんだけど……」

戸惑うメガネくんから目を逸らしスルーして。

「さ、練習を始めるわよ。ストレッチをしたら簡単に敷地一周してきなさい。それが終わったらキャッチボール。はい、行って」

「」「はい!!」「」

葵はランニングの時の掛け声どうしようかと悩むのであった。簡単にストレッチをして、2列になって敷地一周する。掛け声は「ファイオー! エイオー! てんもくん……プラチナくふあいつ!! ふあいつ!!」などと迷走していた。それで、ランニングが終ればお待ちかねのキャッチボールだ。

初めて白球を手にした者は感動していたり、2人一組になってキャッチボールを開始した。グローブは、持参できる者は持参しているし、持っていない者は道具倉庫の中にある支給用の古いグローブを使うことになった。1人、メンバーがいないのでちようど8人で割り切れる。葵はソニアと。マシロ先輩はあのニューカマーと。メガネくんは三船と。最後に馬淵と鹿苑でキャッチボールを開始する。

うん、思っていたよりすんなりキャッチボールできている。たま

に、暴投が目立つけど、初心者の織部、馬淵、鹿苑もサマになっていた。普通に練習したら、すぐに使えるレベルだ。

キャッチボールも慣れてきたら、互いの距離を広げて遠投に移るのがいいだろう。片方が徐々に後ろに下がり適度な位置で軽く遠投をする。監督としても、誰が肩強いのか確認したいところでもある。葵やソニアはやはり上手かった。マシロ先輩も相手の胸元にコントロールされた球を投げていた。織部は「ふんぬらばああああああ!!」とか叫んで大暴投していた。結構な強肩だ。まあ、予想できたことだが、メガネくんは見た目通り身体が華奢な故にそれほど肩は強くない。馬淵、鹿苑もそこまで肩が強くなさそうだ。というか、まだ初日だ。これからである。

三船はやはり中学の時に外野を守っていたこともあり、良いフォームで投げていた。しかし、受け取る側がミスって球が後ろに逸れてしまっていた。太陽の日差しが眩しくて顔を逸らしてしまったのであった。

「黒瀬、悪いべ!!」

「いや、こっちこそ!! すぐ取ってきますんで!!」

そう言つて、メガネくんは後ろに逸れたボールを追いかけた。ボールはグラウンドを飛び出し転がっていく。追いかけて、追いかけて…… 通行人の乗る自転車の車輪に当たってボールは転がるのをやめた。

そして、メガネくんも走るのをやめて立ち止まった。

「な、なんで……」

メガネくんは当然の疑問を口にした。転がったボールを止めてくれた通行人は例のヤンキーくんだったから。なんでこのタイミングでここにいるんだろうかとメガネくんは困惑した。球磨はしかめっ面でメガネくと足元にある白球を交互に見ていた。拾うか迷っているようにも見えた。

ただ、メガネくんも近くまでいって拾う勇気がなかった。ヤンキーは嫌いだ、球磨は自己中みたいな凶暴な輩ではないことは知っている。クラスでも普通に話すこともある。世間話をするってわけでもないがな。それでも、あれ？あいつイイ奴なんじゃね？と時たま思うことがある。いつも不機嫌だが。

だから、球磨1人なら戸惑いながらも挨拶ぐらいして球を拾いに行くこともできた。しかし、それをさせない大きな障害があった。それは球磨の後ろの荷台に跨っている金髪ギャルがいたからである。

「チーっス、メガネくん。元気〜?」

「ど、どうも……」

ななおうぎいずみ
七々扇泉の存在が、メガネくんの行く手を阻んでいた。

同じ1年F組のクラスメイトにしてヒエラルキーの頂点に立つ女子グループの1人だから、超苦手な1人だから、メガネくんは戸惑い緊張して動けない。しかも、男子と女子が2ケツしているのだ。この2人はカップルのようにしか見えなかった。ヒエラルキーの高いリア充2人だからこそ底辺のメガネくんは、それを見ただけで何か凹むのであった。

そんなメガネくんの心境など知る由もなく、球磨は舌打ちしながらも足元のボールを取ろうと手を伸ばした。指先に引っかけたボールが後ろに転がった。また舌打ちする。だから、それを察して七々扇が代わりにボールを取ってあげた。横着せずに、荷台から降りてかかんでボールを取ってあげた。短いスカートは中が見えそうで、でも見えない。

「ほら、メガネくん。パ〜ス」

「え、あ、ありがとう……」

綺麗なフォームでキレイな軌道で胸元にボールが返ってきた。意外だった。七々扇はしてやったりとピースしてみせたりして、メガネ

くんは不覚にもちよっぴりドキツとした。

「じゃ、またあとでね〜メガネくん」

「つーか、ここ駐輪場は？」

「テキトーでいいっしょ。ほら、あっちにいっぱい止まってるし。レツツラゴー！」

「ちっ、めんどくせ……」

2人は自転車を止めにメガネくん達が止めた方まで移動した。メガネくんは、やっと魔女の呪いが解けたかのように、一目散にグラウンドへ戻っていった。

「たいへんだー！ー！！」

これはたいへんだ。

「敵襲ー！！ 敵襲ー！！」

「そ、そんなに慌ててどうしたべ……まさか例の女が攻めてきたべか……もう手を打ってきたべか!？」

「あ、いえ、違います。敵襲って言いたかっただけですんで」

「あ、そうなの……」

「なんか、すみません……」

「お、おう……」

なんか、気まずい雰囲気になった。

そして、監督の号令で皆はキャッチボールをやめてベンチまで駆け足ダッシュして集合した。それと同時にチャリンコを止めてきた球磨たちもグラウンドにやってきて、辺りがざわめき出す。

球磨がここに来た自体驚くべきなのだが、隣の金髪ギャルは誰だ？と驚いていたり、ギャルがべったり球磨にくっついてる（そういう風にワザとしている）ものだから何名かはショックを受けていた。リ

ア充爆発しろと……

「お、おのれえ。球磨くんは誘ったけど、そっちの誰かさんは誘ってないんだけどなー」

「あ、葵ちゃん。またちよつと顔怖くなってるよ。スマイル、スマイル……」

「オー、ソウシはモテモテですネー。シユラバってやつが見てみたいデース。ハリアアップ」

「見たまえ後輩男子諸君。悲しいかな、あれがリア充ってやつだぜ」
「くっ……」

それでも現実を受け入れることができそうにもない童貞諸君。誰かは膝から崩れ落ちこの世の不条理さを嘆いた。

「あら、七々扇さんじゃない。昨日、ミーティングに参加してくれたようだけど、野球する気になったのかしら？」

「あーしは球磨の付添人だし。まー気になさらずに……チケットにベンチで見学させてもらいまーす」

「そ、好きにしなさいな」

七々扇は球磨に一声かけてベンチの方へ移動した。ベンチに座って足を組みさつそくスマホをいじる辺り、野球に興味ないですーって感じの印象を受けていた。

そんな彼らをスルーして、球磨は舌打ちをしてブレザーをベンチに放り投げた。カッターシャツの袖を捲っては、ベンチ横に設置されたバットスタンドから一本、金属バットをチケットに取り出し、ズカズカとバッターボックスに入った。

そして、素振りをしだした。

「あいつはあいつで何してんだよ……」

「ん、見ての通り素振りだよ」

メガネくんの疑問に葵が答えた。何を当たり前のことを訊いてるの、と。

「なあ、あいつ、なんで不機嫌そうに素振りしてわけ？」

「ん、それはこれから一打席勝負の続きをするからだよ」

「え、なんだって……??」

メガネくんは耳を疑う。何かの聞き間違いであってほしかった。話が急展開過ぎてついていけない。そもそもこの赤毛アホ子についていてない。常識を疑ってしまう。何かおかしい。絶対におかしい。自由すぎる……というか、1人ユニフォームとスパイクを履いてやる気満々だったのは一打席勝負するためだったのかと、今にして思った。

天文白金野球同好会は普通じゃない。そろそろ不測の事態にも慣れようぜ、メガネくん。

「葵、皆にわかるようにちゃんと説明してあげなさい」

「ほーい」

監督に促されて葵は何も知らされていない彼らに説明をした。そこには1人、不敵に笑う少女がいた。今まで見せたことのない少女の一面。この事実を知っている千草だけは思わずぐくりと生唾を飲み込んだ。

「実は昨日のミーティング後に、チーちゃんと2人で球磨くんの自宅まで押しかけて宣戦布告してきてきました。だから、これから1打席勝負の続きするんで、みんな、守備よろしくお願いしまーす!!」
「「「な、なんだってー!?!?!」」」

もうどこからツツコミを入れたらいいかわからない。だが、一打席勝

負の続きが始まる。

「ワンストライクからだったなよ。さっさと始めようぜ」

さあ、決着をつけよう。